# 大正女子國文讀本 修正版 卷五

37.59
H019
資料室

42180
教科書文庫
4
810
42-1923
200030
2421

9

375.9
H019

資料室

大正十二年二月一日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科用

保科孝一編

# 大正女子國文讀本

東京 會資社 育英書院發兌

廣島大學圖書印
廣島大學 教 41743 図書

# 大正女子國文讀本 修正版 卷五

目次

一 國體の精華……佐々木高行……一
二 醍醐の花見……笹川臨風……五
三 花賣……戸川殘花……一〇
四 峠の茶屋……夏目漱石……一三
五 藥師堂……有島武郎……一八
六 日本の女性……土井晩翠……二三
七 オルレアンの少女……中内蝶二……二四
八 ランスの戰場……下田將美……三三

九　小さき者へ　その一……有島武郎…四一
一〇　小さき者へ　その二……四五
一一　小蛇の疵……新井白石…五一
一二　浮島が原の對面……（義經記）…五四
一三　大井川……淺井了意…五八
一四　燕……天野藤男…六三
一五　舟路……島崎藤村…七〇
一六　平和條約……近衞文麿…七三
一七　信濃路の旅　その一……正岡常規…七九
一八　信濃路の旅　その二……八四
一九　村岡局……（日本の婦人）…九〇



二〇　夏の草花……三宅花圃…九八
二一　水あそび……德富蘆花…一〇三
二二　蚊やり火……一一〇
二三　風と露……三好學…一一三
一　風の音……一一三
二　露の玉……一一五
二四　夕陽の美……高山林次郎…一一七
二五　空行く雁……（曾我物語）…一一九
二六　旅にある友へ……樋口一葉…一二六
二七　南京の壺……柴田亨…一三〇
二八　世界の歌枕……上田敏…一三五

廣島大學圖書之印

# 大正女子國文讀本 修正版 卷五

## 一　國體の精華

邦域異ならんには、風氣も亦自ら異なるべく、風氣異ならんには、政體も亦隨ひて異なるべし。これ勢の止むべからざる理なり。されば宇内に國を立つるもの、其の政體各〻さま〴〻にして、一樣ならざることは固より言を俟たざるも、今その大要を取りすべていはば、立君の國と民主の國との二つを出でざるべし。而して立君の政必ずしも民主の治に劣れりとせず、民主の治必ずしも立君の政に優れりとせず。故に立君の政

をもて民主の治に代ふべからず民主の治をもて立君の政に代ふべからず。たゞ其の建國の體を顧み、その本と末とをよく照らし合はせて、後々の國是を計らんこそ必要なるべけれ。

按ふに民主の治にして純粹なるものは、かの合衆國なるべく、立君の政にして至醇なるものは、我が大日本帝國なるべし。

まして我が帝國の君位は、其の基するところ甚だ遠く、下よりおし戴きまつりて卽け奉れるにあらぬをや。はじめ皇祖その皇孫に此の國を委ねて宣りたまはく、「この豐葦原の中つ國は、我が子孫のつぎ〳〵知らさん國なり。」と。又神器を授けて宣り給はく、「これを視ること、なほ我が前に齋くが如く、同床共殿にして仕へまつるべし。天津日嗣の隆ならんこと、天壤と窮りなからん。」と。あゝ、皇統の淵源と帝業の基礎とは、全く此の大詔に於てさだまれるなり。

斯くおごそかに統を垂れ極を立て給ひたれば神武天皇高御座に卽かせ給ひし以來も、既に御代は百二十餘代、年は二千五百餘年の久しきに及び、一系の皇統は連綿として絕ゆる時なく、君臣の秩序は井然として紊れしことなし。げに皇祖の大詔は、ことば約に、旨廣く萬古不易なるものになん。されば明治天皇は、明治の二十二年に帝國憲法を發布せさせたまひて、皇祖皇宗の遺訓をついで、「大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。」とぞ宣り給ひける。この古今一貫なる歷史の精粹は高く聳えて芙蓉峰と顯はれ、廣く湛へて琵琶湖と彰はれたり。

恩澤上に積み士氣下に振ひ、未だ嘗て一度も外辱を受けし事なし。あゝ、盛なるかな。これ誠に世界無比の國體なるが故にこそ。

抑〻源泉清からざれば、百里の長流もつひに澄むべき期なし。砂上に金殿玉樓を構へんよりも、巖上に茅屋竹緣を築かんこそ、堅牢にして安穩ならめ。智をもて王たるものは、一旦その智失すれば、則ち其の身も亦亡びん。力をもて國を立つるものは、一朝その力衰ふれば、やがて其の國も亦衰へん。あゝ、是等の狀態は萬國史乘に於て常に散見するところならずや。古賢曰く、「盡く書を信ぜば書無きに如かず。」と。史を讀まんもの、眼識を尙ぶこと既に久し。我を明かにして彼を顧みば、國

古賢　孟子を指す



體の精華それ孰れをか優れりとせん。

（佐々木高行）

佐々木高行　舊高知藩士侯爵。樞密顧問官となり明治四十三年薨八十一歲

醍醐　山城國宇治郡にある。京都の東南。秀吉の花見は慶長三年三月十九日

殿下　豐臣秀吉。關白であつたから殿下といふ

若君　秀賴

## 二　醍醐の花見

あるほどの寺々の名花、ところ〴〵の花園、いづれも道の左右に埒を廻らし、五彩の色華やかに緞子の幕を打ち、殿下には若君以下上臈衆を從へ、歩行にてゆるやかに歩を運ばせられる。花は今を眞盛り、梢も枝もたわゝに咲揃うて、風あらば散らうとする。五重の塔の朱は、常磐の松・杉に映つて、谷川の水は瀨に玉を轉ばす。幽かな韻は風なきに起り、山路悠々として寂しい趣が身に逼る。

星霜此に幾百年、不斷の露にぬれそぼちて、苔蒸したる石橋を

渡り行くと、左の方に古りたる一宇の堂がある。増田少將こを便りとして茶屋をしつろひ、殿下に一服を進め參らす。

増田少將　名は長盛。秀吉の臣

「ない手前ぢや。」

と殿下には大のよい御機嫌。

これより上は花見山とて、千株萬株の花は一樣に咲出でて、谷の彼方此方には、一面に花の雲がある。御伴のうちにて風雅の志あるものは、

聞くならく醍醐は花の世界
見きたれば此處は雪の乾坤

と口吟めば、又

天が下殘らぬ花のさかりには

聞く次らく云々　此の時御伴をした、右衞門介といふ女房の句

天が下云々　同じく御伴をした高洲（カウス）といふ女房の作



山より山や風にほふらむ

と詠むものがある。

新莊雜齋　新莊直頼の弟直壽、雜齋は其の號、秀吉の臣

十丈の巖が峙つ下に、ちとばかり平かな所があつて、鬱然たる老木幾千本となく茂り合ひ、日の光を漏らさぬ。此處には新莊雜齋佗しい茶屋を建てて御茶を奉る。小川土佐守が營みたる茶屋、屋根は茅にて葺き、垣は葭もて結び、粗末なる疊を敷き、葦屏風をまはす。九尺四面の萱葺ける辻堂に、荷なひ茶屋を置き、てくろ坊の上手、操の名人が、さま〴〵の藝をつくせば、やんや〳〵の聲を絶たぬ。

前田玄以法印　名は宗尙。豐臣家五奉行の一人

北政所　關白の妻の稱。こゝは秀吉の正室淺野氏

土佐守の茶屋より十五六町も上りたる處に、前田玄以法印茶屋を營み、殿下御父子の御座所、北政所の宿坊、局々の休息所、行

水所をあまたこしらへ、此處にて行水を進め參らす。一風呂さつと浴び給ひて後、殿下は奉れる御膳を快く食うべ給ふ。此の階の上には町屋を作り、さま〴〵の商ひ品を並べ、裏には茶屋をさしかけにしつくろふ。東の谷には、眞紅の絲もて打ちたる太綱を引渡し、あまたの鈴をつけ、花に集ふ鳥を逐ふ。若君の御慰にとて、庭の遣水に小舟を作り、人形を載せて流す。嚴に當りて人形の驚き騷ぐ風情は、唯まことの人かとばかり疑はれた。長束大輔の茶屋では馳走を捧げ、政所を始め局々は、一樣に裝束をかへさせられる。御牧勘兵衛の茶屋、新莊東玉の茶屋を過ぎ給ふに、よしありげな茶屋ありて、垣は柴、編戸は竹、其の店に燒餅ありたるを、殿下こゝろよく食うべ給へば、

長束大輔　名は正家。五奉行の一、關が原の役東軍に遁られて自殺した

御牧勘兵衛　秀吉の臣

新莊東玉　雜齋の兄直頼の弟、名は直忠、剃髮して東玉といふ。秀吉の臣

「おあしを賜はり候へ。」と申し、店屋に吊したる瓢箪一つ取りて、腰にしたまへば、「その代をくだされませ。」と申しながら、茶屋の女房二十歳ばかりなるが二三人、殿下の雙の御手にすがり、「其のまゝにて御歸りはなりませぬ。おあしをくだされませ、お濟ましくださりませ。」と笑ひながらに申し上ぐれば、「さらば其の算用いたさうぞ、代を取らせうぞ。」と、ずいと茶屋の内に入り給ふと、中では酒宴。

「目出たや松の下、千世も幾千代、ちよ〳〵。」の祝の小歌で、さしつおさへつ、夜も更け行いてから、宿坊への御歸館。

「又來ん秋は紅葉を見に參らうぞ。」との御約束で、三寶院へは新知千六百石の御寄附あり、さま〴〵の下し物を賜はつて、一

三寶院　下醍醐にあつて醍醐寺座主の住院

時にときめく榮華は目を驚かすばかりである。（笹川臨風―淀君）

笹川臨風　名は種郎。文學士。歴史物語の著述が多い

## 三　花賣

一

花や、はな、花をめさずや。　淺茅生の露ふみわけて、賤の女が手折りし花ぞ。　花や、はな、花をめさずや。（清盛の花）

二

花はしも世にまじらひて、浮雲の富にけがれず、うたかたと消えてゆくべき、はえもなし、ほまれもあらず。

三

春風の愛にしそだち、秋風の義におひたちて、色もあり、香もなつかしや。　花は美の命なりけり。

四

露に染め、霞にあらひ、白きあり、紅もあり、かぐはしや、うべ、神御衣と、人みなの言ひにけるかな。

五

貴人も麗しといひ、平民も清しとたゝへ、見る時のその束のまは、罪咎の思もあらず。

六

花や、はな、花をめさずや。　賣る花は、花賣る人と、天地の差別ありけり。　花や、はな、花や、花、花。

七

草籠に鎌とりそへて、賤の女はあはれなりけり。霜枯の殘んの菊か、春雨に散りかふ花か。

八

はゝそばの母もなし、兄もなし、妹もあらず。蝶は追ひ、花は笑へど、わが身には涙なりけり。

九

あな憎や、花をし見れば、天地の御手に抱かれ、白玉の露を口にし、霞てふ衣をまとへり。

十

あな憎や、憎やと、花を、いくきれに手折れど匂ふ、姫百合の首うなだれて、爭はぬ姿はゆかし。

戸川殘花　名は安宅。文章家

十一

おぞや、愚か。四季をり〳〵の花はみな、神の惠みに、色も香も咲きいでしなり。花こそは、人の鑑なりけれ。（戸川殘花「詩文軌範」）

## 四　峠の茶屋

おいと聲を掛けたが、返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。

五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかりならんで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

おいと復聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上にふくれて居た雞が、驚いて眼をさます。くゝゝ、くゝゝと騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黑な茶釜がかけてある。幸ひ、下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと入つて、床几の上へ腰を卸した。雞は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐらしい。



床几の上には、一升桝程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顏で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の見世をあけ放しても苦にならないと見える處が、都とは少し違つてゐる。

返事がないのに、床几に腰をかけていつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、さぞ御困りでござんしよ。おゝ〳〵、大分お濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し焚附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつ〳〵と二聲で雞を追下げる。こゝこゝと駈出した雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。



「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳抜盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黑く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に燒きつけられて居る。

「御菓子を。」と、今度は雞の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して婆さんの横顏を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は、――先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈の中がぱち〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。さぞお寒かろ。」と云ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに微かな痕をまだ板庇にからんで居る。

夏目漱石
名は金之助。小說家。大正五年歿五十歳

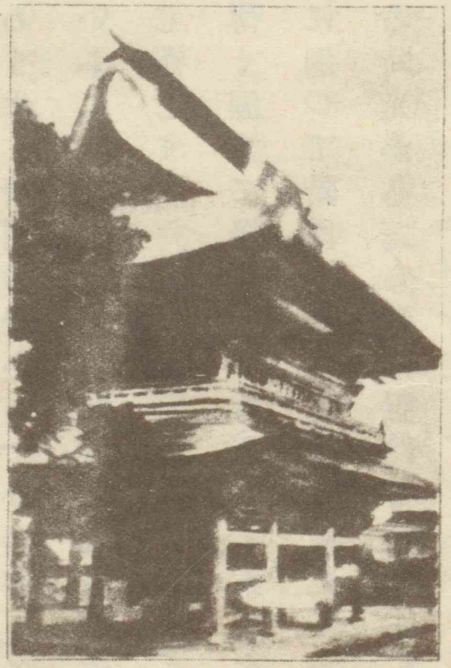
（夏目漱石―鶉籠）

## 五　藥師堂

袷一枚で丁度いゝ時候――それはいゝ時候です。私は散歩の時には、よく獨りで坐禪堂の奥にある藥師堂に行きました。これは圓覺寺內で一番古く一番よく保存された建物で、國寶だか保護建造物だかになつてゐます。坐禪堂を右に、形のいゝ小さな鐘樓を左に見て、突當つた所に、簡素な塀に設けられた美しい小さな唐門があります。その欄間の彫刻は、人の注意を牽かぬ程に古びてはゐますが、尊い工人の腕の冴えを見せてゐます。その唐門を入ると小さな方形の庭があつてすぐ本

圓覺寺
鎌倉にある有名な寺。五山の一。藥師堂は先年燒失した

圓覺寺山門



堂になつてゐます。鎌倉時代の寺院建築に特有な茅葺屋根の勾配から、それを受けるせりもちの簡古さ。正面を三つの開き扉にした、その扉や欄間の意匠、凡てがお互に顧み合つて完全な調和を支持してゐます。唐門の邊から一目にそれを見ると、建築物を見るといふより、地上に据ゑられた整つた床の置物を見るやうな感じがします。私は正面の入口の所で履物を脱いで、いつでも薄く濕つて居るやうな石疊に素足を踏入れます。須彌の後に廻つて階段を登ると、そこに奥殿があります。本堂に踏入る時、光から遮られた眼は、こゝに來て更に一入の暗さに襲はれます。そこでぢつと立つてゐると、堂の奥深い所に、豆のやうにかすかな常燈明が點されてゐるのを發見するでせう。そこには私が住慣れてゐるやうな世界はもうありません。

私の住慣れてゐる世界は、光の世界であり音の世界であります。その光の中に影が交る事によつて、又音の中に靜かさが交る事によつて、その世界には綾と變化とが生じます。然るに佛者の世界は常暗の世界であり沈默の世界であります。それがその世界の常態であります。その境界に幽かに光が生じ、音響が動く事によつて、綾と變化とが生じます。私は佛者のこの見地が、一小建築の中にさへ完全に象徴されてゐるのを見て感に打たれました。黑天鵞絨のやうな深甚な暗黑と沈默との中に、神々しく點された常燈明――それは宛ら釋

尊の肖像とは云へますまいか。世の凡ての人が見たとは全く反對に世を見て、それに安住した聖者の勇猛心を、私は畏の心を以て感じたやうに思ひました。こゝにも考へて見なければならない大千世界がある事を思ひました。人の心といふものゝ豐富さを、この小堂に於て驚き眺めました。堂を出ると世界は眼前に別事を行じてゐます。春は駘蕩として夏に續かうとしてゐました。

（有島武郎―小さな灯）

有島武郎
小說家

## 六　日本の女性

涙ふなきけふ揚ふ旗
嗚呼君やさ〳〵乙女性の力
（土井晩翠―東海藝子作）

土井晩翠　名前は林吉。第二高等學校教授。英學者、新體詩人

シノン城　フランス國ロアール河畔にある市

チャールス　佛王チャールス六世の子チャールス七世（1403–1461）

ジャンヌ　ジャンヌダルク

## 七　オルレアンの少女

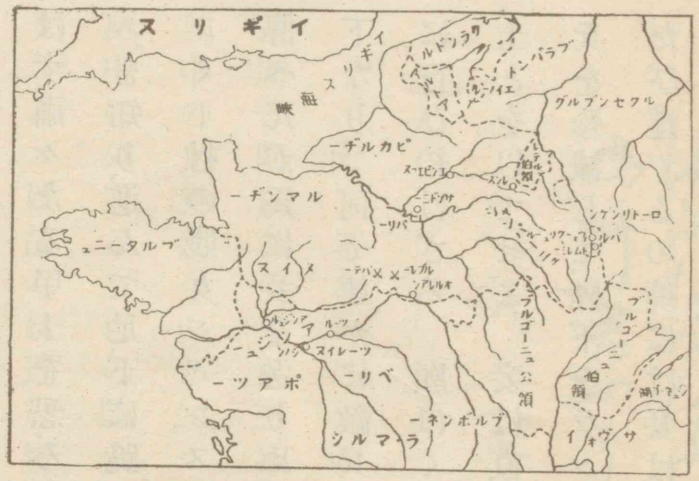
西暦千四百二十九年三月九日の夕陽は西に沈みぬ。シノン城中の光景は今いかに。滿堂の銀燭は煌々として晝を欺き、庭中に列なる三百の騎士は、肅々として兜の星を輝かす。チャールスは故らに瑤冠・寶位を捨てて、侍衞の諸官と服を同じうし、玉座遙かに臣僚の間に交り、以てジャンヌの朝するを待

ドムレミー　シャンパーニュ州佛國の獨逸國境に接する所にあるランス市　巴里の東々北にある當時チャールスは王と稱したけれど、未だランス市の大伽藍で宗教的の戴冠式を行はなかつた

オルレアン　佛國ロアール州の首都。パリの西南七五哩、ロアール河の右岸にある

てり。ジャンヌは徐に堂に入りて、煌々たる光を眩しとも思はず、肅々たる甲士を恐ろしとも思はず、一瞥直ちにチャールスを知り、進んで足下に跪いて曰く、「仁慈なる陛下よ、妾はドムレミー村の賤女ジャンヌにて侍り。在天の主、密旨を陛下に傳へんが爲に妾を送りぬ。佛蘭西の國王たらん者は卽ち陛下なり。何ぞ速かに敵兵を掃蕩して、卽位の大禮をランス市に行ひ給はざる。願はくは妾に假すに、兵馬の權と一隊の兵士とを以てせよ。妾は直ちにオルレアン城に赴き、誓つて英兵を殄滅して、陛下をランス府に入れ奉らん。而して素念一たび遂ぐるの曉には、妾は舊の如く田野に退き、衆民と共に陛下の恩德に浴し侍らん。他には望む所あらざるなり。」と、音吐

ボアチエー　佛國の西部、ブイエヌ州の都府。ツールの南西六十一哩、ボアチエーの訊問の日は三月二十二日




朗々、風姿凛乎として冒すべからず。チャールスは覺えず容を正して、其の傳ふる所を聞けり。かくてジャンヌは遂に密旨を傳ふることを得たり。チャールスは果して其の言を信ぜしや否や。性來優柔不斷なるチャールスは、己が疑惑を解くに足るべき十分なる證左を見るにあらずんば、ジャンヌの所謂神託なるものは、毫も信を置くに足らずと思ひしかば、數多の聲望・學識ある碩儒・高僧等より成れる、ボアチエーの議院に於て、ジャンヌを糺明に附せんと決しぬ。

ジャンヌは報を得て、少しも臆する色なく、「妾を導き給ふ者は神なり。唯其の命じ給ふ所を述ぶれば足るのみ。願はくは妾をして行かしめよ。」と答へて、三月十一日、ボアチエーに至りぬ。

あはれ、ボアチエーの糺明こそ、ジャンヌが運命の分るゝ所なりけれ。進められて國家の救主とならんも、退けられて君を僞るの罪人となちんも、一に其の結果にあり。集る者は誰々ぞ。ランスの大僧正を始として、僧正・大法官・樞密院顧問官、其の他數多の鴻儒・碩學何れも難題を心にゑがきて、ジャンヌの到るを今や遲しと待ちかけたり。ジャンヌ既に入りて席に

列なるや、博識の聞えある一人の神學博士は、先づ起つて問うて曰く、

「ジャンヌよ、聞けば汝は卑賤なる婦女の身をも顧みず、自ら兵馬の權を握らんことを願ふとか。そは兎も角、『英兵を國外に掃蕩せんことは、上帝の神慮なり。』といふに至りては、聞棄て難き汝が言なり。果して然らば、神は全能の力を以て、自ら英兵を掃蕩し給ふべきに、之が爲に再び干戈を動かさしめ給はんとは、實に怪しむべきかぎりならずや。」

ジャンヌは從容として答へて曰く、

「英兵の侵し來れるは、佛國を占領せんが爲なり。軍敗れざるに、いかでか此の國を退くべき。而して彼を破るべき者も、亦これ兵にあらずや。故に神は我が兵を救うて、利あらしめんと欲し給ふのみ。」

意地悪き一人の僧正は問うて曰く、

「ジャンヌよ、汝は『後園にて神託を受けたり。』と稱す。知らず、天使は如何なる聲にて汝に語りしか。」

ジャンヌはほゝゑみながら答へて曰く、

「卿が聲よりは麗しかりき。」

僧正恥ぢて顏色なし。論理に長けたる一人の博士は、故らにジャンヌを揶揄して曰く、

「ジャンヌよ、汝は果して神を信ぜるか。」

ジャンヌは色をなして答へて曰く、

「卿等が信じ給ふよりは遙かに深し。」

語未だ終らざるに、一人の僧侶は又詰りて曰く、

「ジャンヌよ、汝は猥りに『國難を救ふべき神託を受けたり。』と稱す。然れども只汝が語る所をのみ信じて、俄かに兵馬の權を授けんは、餘りに早計に過ぎたり。果して神託を得たりと云ふ證ありや。」

ジャンヌは笑つて答へて曰く、

「妾は其の證を示さんとて、此の議院には現はれず。卿早く其の證を見んと思はば、疾く妾をオルレアンの城に送れ。妾が『神託を受けたり。』と稱せることの眞僞は、卽ち其の結果にあり。願はくは妾に一隊の兵を假して、オルレアンの城に送れ。」



一人の僧侶はジャンヌを苦しめんと欲して、問うて曰く、

「ジャンヌよ汝は果して文字を知れりや。」

ジャンヌは少しも恥づる色なくして、答へて曰く、

「妾はもとよりAも知らずBも知らず、一文不通にて侍り。されど上帝の命じ給ふ言は、卿等が著せる書を讀むより、遙かに價ありと信ず。妾は唯オルレアン城の圍を解きて、陛下の戴冠式をランスに行ふべき任務あることを知るのみ。」

斯くて糺明夜に亙り、難問又難問、櫛の齒を引くが如く相次いで至れども、ジャンヌは少しも淀む所なく、其の答辯の明晰なること、誠に快刀の亂麻を斷つが如し。滿堂の碩學高僧、何れも舌を卷いて、其の智囊の測り難きに驚き、遂にジャンヌの言

に服せり。

紛問の結果は、實に意想の外に出でたるを以て、或は妖術を以て愚民を惑はさんとする魔女の族ならんことを恐れ、三人の貴夫人をして、親しくジャンヌが言行を吟味せしめしに、篤實・溫順、女性としての操行一つも缺くる所あらざりき。是に於てかジャンヌの名聲は頓に揚り、風評一時に喧しかりき。初は狂女と誹りし者も、全く熱心なる愛國家なる事を知り、眞

ジャンヌ・ダルク（ユエー筆）

三人の貴夫人

チャルース七世の姑たる舊のシシリー及びイエルサレム王后と、アンジュー公爵夫人と、オルレアン知事サー、ド、ゴーリールの妻との三人



に國難を救はんとて來りし神の化身なる事を信じぬ。內、宮廷に在る百官は勿論、外、軍旅に在る將卒に至るまで、皆擧つてジャンヌを敬ふに至れり。

（中內蝶二―世界歷史譚惹安達克）

中內蝶二　文學士、新聞記者

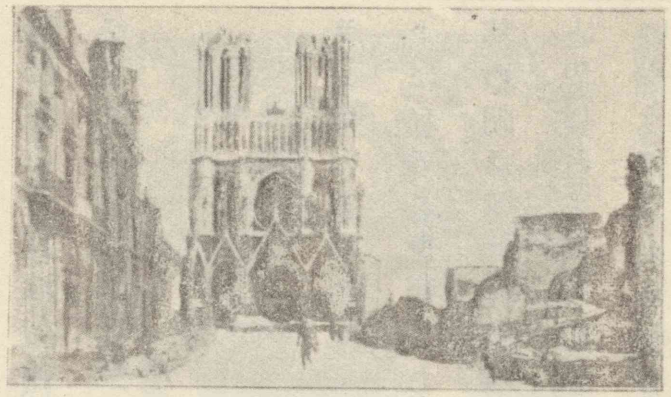
ランス　フランス國、マルヌ州にある市街。パリ市の東北八十哩。此の市にある大寺院はフランス王が戴冠式の式場に用ひる例となつてゐたもので歷史上名高い。

## 八　ランスの戰場

ランスの戰場を見て廻つた一日は、想像して居つたよりも以上に、私の心を痛ましめたものであつた。

其の朝ランス停車場に降りて、戰前にはさぞ美しかつたらうと思はれる此の町が、砲彈を受けぬ家とてはたゞの一軒もないやうに見える程、むごたらしく破壞し盡されて居るのを見て、今更のやうに戰禍の恐しさを思つた私は、其の午後乘合の

自働車に乘つて、血腥い香のまだすつかり去切らぬ新戰場を、夕暮かけて見廻つた時に、いよ〳〵凄慘の氣に打たれざるを得なかつた。



ランスの戰場

ランスの街を出はづれると、一條の大道が長く白く目前に開展された。此の廣い街道には、白樺やら栗やらの並木が兩側に立ちつゞいては居るが、大きい木は大方砲彈の爲に倒されてしまつて、初夏らしい青葉若葉をつけてゐる敗殘の木々も、よく見れば樹幹に幾十幾百と云ふ數へ切れぬ大小の砲彈の痕を止めてゐる。



風が渡ると、青葉こそかさ〳〵と鳴るけれども、砲彈に折碎かれた梢は、今も悲しげに身をふるはしてゐるやうである。此の並木街道の左右は一面の野で、右は獨軍左は聯合軍の陣地であつたのだと、案内者は教へた。

車の走るに從つて、野はどこまでも廣く開けてくる。所々に村落らしい所もあるが、家は悉く崩れ倒れて、住む人は元より見えない。壁をつきぬいた大きな砲彈は、屋根をはね飛ばして何處かに飛んだのであらう。家と云ふ家は死んだ蛙のやうにべたりとなつてゐるか、然らざれば跡形もなく礎だけを殘して粉微塵にくだけてゐる。すべての墓石が、砲彈の爲に壞されてゐる墓場もあつた。鐵の墻だけを殘して消失せた

教會もあつた。殘された墻にからみついた野薔薇が、一面に白い花をつけて咲いてゐるのが、又なく物寂しかつた。かうした村落を通りすぎれば、又兩側は廣野である。

野には鐵條網がまだありし昔のまゝに縱横無盡に張廻はされてゐる。塹壕もそのまゝになつてゐる。大きな大砲の彈丸もころがつてゐれば、タンクも轉げてゐる。土はすべて砲彈の爲に荒し果されて、白い地膚を現して居るけれども、その白い地膚を縫つて佛蘭西特有の野草である、眞紅な芥子と黃色い菜の花とが、一面に見える限り咲亂れてゐる。折々は空色に澄んだ矢車草の花も交る。「あのあたりがヒンデンブルク線」と案内人の指す方を見れば、一際濃い色に咲亂れた紅芥

ヒンデンブルク線　ドイツの將軍ヒンデンブルクが布いた戰線

ベリー　オ　バック　ランスの附近にある町

子の野を、尾の長いかさゝぎが地をぬうて低く飛んでゐた。

ベリー、オ、バックで車を降りて、幾度か爭奪の目標となつた當年の激戰地を弔つた。人口四千を算したと云ふ町の面影は、そも〳〵何處に求め得るのであらう。そこには一軒の家もなく、雞犬の聲も元より聞えぬ。たゞ殘れるは荒凉落莫たる人間同志の殺傷の片身のみである。街の中を流れてゐた立派な運河も、一たび獨軍の占領する所となつてからは、水は乾されてそのまゝの塹濠に利用され、今も猶、水の涸れた底の方に、砲車やら鐵條網やらが投込まれてゐる。錆付いた砲車も何人かの血を浴び、何人かの生命を奪ひ去つたものなのであらう。

摺りむけた生々しい人膚を偲ばせるやうな白い土山を上つて行くと、成程こゝは兩軍が必死に爭奪を試みたのも無理はないと思はれるやうな形勝の地である。廣い野は目の下に見える。遠く離れたランスの街も指呼することが出來る。しかしこの景色は何と云ふ淋しい落莫たるものなのであらう。靜かに遊び群つて居た牛や羊の群は今何處にあるのか。曾ては此の野に、此の小川のほとりに、若き生命の漲るまゝに、遊び戯れた此のほとりの子供たちは、今そも〳〵如何なる運命に陷つて居るのであらうか。母子の間に、兄弟の間に、夫婦の間に、いかに泣いても泣盡せぬやうな悲劇の數が、こゝで釀されたことであらう。見よ、是等すべての悲みと苦みとの過去を、空しき夢と忘れ果てたやうな姿をして、荒れた野と、掘崩した塹壕の白い線とが冷たく横はつてゐる。……ともすれば佇んで考へ沈まうとする私を引立てるやうに、案内者はどん〳〵先へ進んで行く。小山を登り盡した所には、丁度噴火口でも見るやうな、大きな、周圍一町にも餘りさうな穴がありてゐた。

それは地雷の跡だと云ふことであつた。「此の土の下には、少くとも四千人の兵が猶現に埋まつて居るのです。」と、案内人は砂のぼろ〳〵崩れ落ちる大穴の底を指して云つた。私は悲しまうにも悲しみ盡せないやうな迫り來る感情に打たれながら、默つて白い大きな口を開けてゐる土の色を見つめてゐ

た。氣がつけばあたり一面に眞紅な野芥子は、やはりこゝにも咲亂れてゐた。そよとの風にも散果てるやうなはかない風情を示しながら、何の心から、此の血のやうな花は荒凉たる戰場の土に咲いてゐるのであらうか。私は默然として其の花の二三輪を摘取つて、手に持つて居た戰場案内記の中へ挿んだ。

山を下りて自動車の待つて居る所まで歸つてくると、道の傍に百姓女のやうな粗末な服をきた女や、裸足で帽子もかぶらぬ貧しい女の子や男の子が、戰場で拾ひ集めたらしい獨逸兵のヘルメットだの擲彈だのを、青草の上にならべて賣つてゐた。

（下田將美―山上の展望）

下田將美
時事新報記者

北國
作者の家族はこの時北海道にゐた

一人の病人
作者の妻

## 九　小さき者へ　その一

知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつてゐたのだ。五人の親子は、どん〳〵押寄せて來る寒さの前に、小さく固まつて身を護らうとする雜草の株のやうに、互により添つて暖みを分ち合はうとしてゐたのだ。然し北國の寒さは、私たち四人の暖みでは間に合はないほど寒かつた。私は一人の病人と頑是ないお前たちとを勞はりながら、旅雁のやうに南を指して遁れなければならなくなつた。

それは初雪のどん〳〵降りしきる夜の事だつた、お前たち三人を生んで育ててくれた土地を後にして旅に上つたのは。

忘れる事の出來ないいくつかの顏は、暗い停車場のプラットフォームから私たちになごりを惜しんだ。陰鬱な津輕海峽の海の色も後になつた。東京までついて來てくれた一人の學生は、お前たちの中の一番小さい者を、母のやうに終夜抱きとほしてゐてくれた。そんな事を書けば限がない。兎も角私たちは、幸に怪我もなく、二日の物憂い旅の後に晩秋の東京に着いた。

今までゐた所とちがつて、東京には澤山の親類や兄弟がゐて、私たちの爲に深い同情を寄せてくれた。それは私にどれ程の力だつたらう。お前たちの母上は、程なくK海岸にさゝやかな貸別莊を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取つて、そこから見舞に通つた。一時は病勢が非常に衰へたやうに見えた。お前たちと母上と私とは、海岸の砂丘に行つて日向ぼつこをして二三時間を過すまでになつた。

どういふつもりで、運命がそんな小康を私たちに與へたのかそれは分らない。然し彼はどんな事があつても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかつた。その年が暮れに迫つた頃、お前達の母上は假初の風邪からぐん〳〵悪い方へ向いて行つた。而してお前たちの中の一人も、突然原因の解らない高熱に侵された。その病氣の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病兒は病兒で、私を暫くも手ばなさうとはしなかつた。お前達の母上からは私の無沙汰を責めて來た。私

は遂に倒れた。病兒と枕を並べて、今まで經驗した事のない高熱の爲に呻き苦しまねばならなかつた。私の仕事は私から千里も遠く離れてしまつた。それでも私は、もうそれを悔まうとはしなかつた。お前たちの爲に最後まで戰はうとする熱意が、病熱よりも高く、私の胸の中で燃えてゐるのみだつた。

正月早々悲劇の絶頂が到來した。お前たちの母上は、自分の病氣の眞相を明かされねばならぬ破目になつた。そのむづかしい役目を勤めてくれた醫師が歸つて後の、お前たちの母上の顏を見た私の記憶は、一生涯私を驅りたてるだらう。眞蒼な淸々しい顏をして枕についたまゝ、お前たちの母上は、冷たい覺悟を微笑に云はして靜かに私を見た。そこには死に對するあきらめと共に、お前たちに對する根强い執着がまざまざと刻まれてゐた。それは物凄くさへあつた。私は悽慘な感じに打たれて、思はず眼を伏せてしまつた。

## 一〇　小さき者へ　その二

愈H海岸の病院に入院する日が來た。お前たちの母上は全快しないかぎりは死ぬともお前たちに逢はない覺悟の臍を堅めてゐた。二度とは着ないと思はれる、さうして實際着なかつた晴着を着て座を立つた母上は、內外の母親の眼の前でさめ〴〵と泣きくづれた。女ながらに氣象の勝れて强いお

前たちの母上は、私と二人だけゐる場合でも泣顔などは見せた事がないといつてもいゝ位だつたのに、その時の涙は、拭くあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙は、お前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまつた。大空を亘る雲の一片となつてゐるか、谷河の水の一滴となつてゐるか、大洋の泡の一つとなつてゐるか、又は思ひがけない人の涙堂に貯へられてゐるか、それは知らない。然し、その熱い涙は、兎も角もお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のゐる所に來ると、お前たちのうち熱病の豫後にある一人は、足の立たない爲に下女に脊負はれて、一人はよちよちと歩いて、(一番末の子は母上を苦しめ過ぎるだらうといふ祖父母たちの心遣から、連れて來られなかつた)母上を見送に出て來てゐた。お前たちの、頑是ない驚きの眼は、大きな自動車にばかり向けられてゐた。お前たちの母上は、さびしくそれを見やつてゐた。自動車が動き出すと、お前達は女中に勸められて、兵隊のやうに擧手の禮をした。母上は笑つて輕く頭を下げてゐた。お前たちは、母上がその瞬間から、永久にお前たちを離れてしまふとは思はなかつたらう。不幸なものたちよ。

それからお前たちの母上が、最後の息を引きとるまでの一年と七ケ月の間、私たちの間には烈しい戰が闘はれた。母上は死に對して最上の態度を取る爲に、お前たちに最大の愛を遺

すために、私を十分に理解する爲に、私はまた母上を病魔から救ふために、自分に迫る運命を男らしく肩に擔ひ上げるために、お前たちはお前たちで、不思議な運命から自分を開放するために、身にふさはない境遇の中に自分をはめこむために、闘つた。血まぶれになつて闘つたといつていゝ。私も母上もお前たちも、幾度彈丸を受け、刀劍を受け、倒れ、起上り、又倒れたらう。

お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日に、死が殺到した。死が凡てを壓倒した。さうして死が凡てを救つた。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分は、お前たちに與へられた一節だつた。若しこの書きものを讀む時があつたら、同時に母上の遺書も讀んで見るがいゝ。母上は血の涙を絞りながら、死んでもお前たちに會はない決心を飜さなかつた。それは病菌をお前たちに傳へるのを恐れたばかりではない。又お前たちを見る事によつて、自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に殘酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び伸びて行かなければならぬ靈魂に、少しでも大きな傷を殘す事を恐れたのだ。幼兒に死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時は女中をお前たちにつけて樂しく一日を過さして貰ひたい。さうお前た

ちの母上は書いてゐる。

子を思ふ親の心は日の光
世より世を照る大きさに似て

とも詠じてゐる。

母上が亡くなつた時、お前たちは丁度信州の山の上にゐた。若しお前たちを母上の臨終にあはせなかつたら、一生恨みに思ふだらうとさへ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上に、強ひて賴んでお前たちを山から歸らせなかつた私を、お前たちが殘酷だと思ふ時があるかも知れない。今十一時半だ。この書き物を草してゐる部屋の隣に、お前たちは枕を列べて寢てゐるのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の齡になつたら、私のした事と、卽ち母上のさせようとした事を、價高く見る時が來るだらう。

（有島武郎―小さき者へ）

有島武郎
小說家

富商
河村瑞賢

## 一一　小蛇の疵

當時天下に雙なしなどいふ富商の子の學ぶ友となりぬる事出で來しに、其の子いひしは、「我が父なる者の見まゐらせて、『必ず天下の大儒ともなり給ふべき御事なり。我が亡兄の娘の候なるに合せまゐらせ、黃金三千兩に求め得し宅地をもて學問の料となして、物學び給ふやうにと、某が心のやうに申せ。』とこそ侍れ。」といふ。

我この事を聞きて、「御志の程忘るべからず。我むかし或人の

申ししことを聞きしに、夏のころ、靈山とかに遊びしものどもの中、池に足ひたし居けるに、小さき蛇の來りて、其の足の大指をねぶるあるが、忽ちに去りては、また忽ちに來りて舐る。かくするがうちに、其の蛇やうやうに大きくなりしにや、後には其の大指を呑むばかりになりしかば、腰よりさすがを取出して、双の方を上にして大指の上にあててまつ。また來りて大指を呑まむとする所をあげざまに刺斬りたれば、うしろ樣に飛去るほどに、家にかけ入りて障子をさす。伴なひしものども、「何事にや。」といふほどこそあれ、石走り木僵れて、地震ふこと半時ばかり過ぎてのちに、障子を細目にあけて見けるに、一丈あまりの大蛇の、唇の上より頭の方まで、一尺あまり斬られたるが、斃れ死したりといふことなり。その有りや無しやは未だ知らねど、今のたまふことに似たるところのはべるなり。はじめ其の蛇の小さかりしほどは、僅かにさすがをもて刺斬りしところなるが、既に大きくなりしに至つては、一尺あまりの疵とは成りしなり。われいま身貧しく窮りたれば、人知れる者にもあらず。此の身のまゝにて、そこの亡兄のあとを承繼ぎなむには、その疵なほ小さきなるべし。若しのたまふところのごとく、世に知らるべきほどの儒生ともなりなむには、その疵は殊に大き

新井白石

にこそなりぬべけれ。三千兩の黃金をすてて、大疵あらむ儒生と成したてられむことは、謀を得給ひたりともいふべからず。たとひ刺斬るところの小さきなりとも、我もまた疵被らむことを願はず。我かくこそ申したれと答へ給へ。」といひたり。後に聞けば、然るべき儒生の、その娘にはあひ具せしなり。此のことをも父にておはせし人に語り申しければ、「めづらしからぬことなれど、よき喩にもありつるかな。」と笑ひ給ひたりき。

（新井白石―折りたく柴の記）

然るべき儒生　黑川某といひ父祖ともに儒者として名のあつた人

父　新井正濟。久留里侯土屋利直の臣

新井白石　名は君美。德川初期の漢學者。德川家宣に仕へて幕政を輔けた

佐殿　右兵衛佐源頼朝

## 一二　浮島が原の對面

佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、今度はことの外嬉しげにて、「さらば、これへおはしまし候へ。見參せむ。」と宣へば彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きによろこび、急ぎ參り給ふ。佐殿つくづくとこれを御覽じて、まづ涙にむせび給へば、御曹司もともに聲を呑みて泣き給ふ。互に心のゆくほど泣きて後、佐殿涙をおさへて、「さても、頭の殿におくれ奉りて、その後御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて、伊東・北條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向のよしは、幽かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、とりあへず御上り候こと、申しつくしがたく悅び入り候。これ御

彌太郎　堀彌太郎

御曹司　部屋住の公達の事。こゝは源義經

頭の殿　左馬頭源義朝

池の尼　平忠盛の後妻平清盛の繼母平頼盛の實母

伊豆の配所　田方郡蛭が島

伊東　名は祐親

北條　名は時政

奥州　今の陸前・陸中・陸奥。秀衡は陸中磐井郡平泉に居た

覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあはする人もなし。平家の討手のぼせばやと思へども、身は一人なり、賴朝自身すゝみ候へば、東國おぼつかなし、代官をのぼせんとすれば、心やすき兄弟もなし、他人をのぼせんとすれば、平家とひとつになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひがたかりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿の、後三年の合戰に、御弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を從へ給ひける時の御心も、賴朝が只今の心にいかでかまさるべき。今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂

八幡殿　源義家
刑部丞　源義光



の憤を息めむ。」と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞしぼられける。これを見て、大名小名たがひの御心おしはかりて、みな袖をぞぬらしける。しばらくありて、御曹司申されけるは、「仰のごとく、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらむ。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ參りて、十六までかたの如く學問を仕り、さて京都に候ひしが、内々平家方便をつくるよし承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡をたのみ候ひつるが、御旗揚の由承りて、取りあへず馳せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見參に入り候心地してこそ候へ。身をば君にまゐらする上は、いかゞ仰に從ひまゐらせでは候べき。」と申し

秀衡　藤原氏。陸奥出羽の押領使基衡の子

もあへず、また涙をながし給ひけるこそあはれなれ。さてこそあの御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ。（義經記）

## 一三　大井川

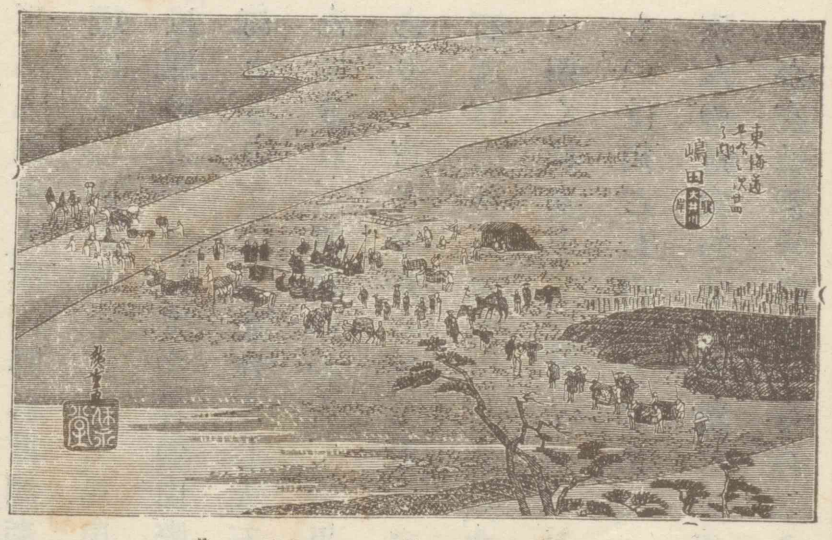
島田が原、今は新田になりて、大井川の水をせき入れて耕作をつとむ。右の方一町ばかりに島田が淵あり。島田より金谷へ一里。

男申しけるは、「いざや、こゝにとまり侍らん。」樂阿彌申すやう、「旅なれぬといふは此の事なるべし。この先に大井川あり。駿河と遠江との境なり。又あの世此の世の境とも見るほどの大河なり。南風には水まさり、北西風には水落つ。飛鳥川にあらねども、大雨降れば淵瀬かはる事度々にて定まらず。或は東の山の岸を流れて、島田の驛を河中になす事もあり、或は西の方を流れて、金谷の山際にそふ事もあり、又は一帶の大河となりて、大木をながし大石をころばす事もあり、又はあまたに分れて、河原のおもて一里ばかりが間に、幾筋も流るゝ時あり。古より舟も橋も渡すことかなはず。波高く、底には大石流れまろびて足を打たれ、水に溺れて死する者も多く、濡鼠の如くになりて、やう〳〵向ひの岸にあがるもあり。島田のものは川ごしのわざに出づ。我が家は水に漂ひ流るれども、旅人の財をむさぼる故に大水を喜ぶ。かの炭を賣る翁が、おのが衣は薄けれども、年の寒きを喜ぶが如し。近頃は、島田と

島田　駿河國志太郡大井川の左岸

金谷　遠江國榛原郡大井川の右岸

飛鳥川　大和國高市郡にある。「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日の瀬となる」（古今集）

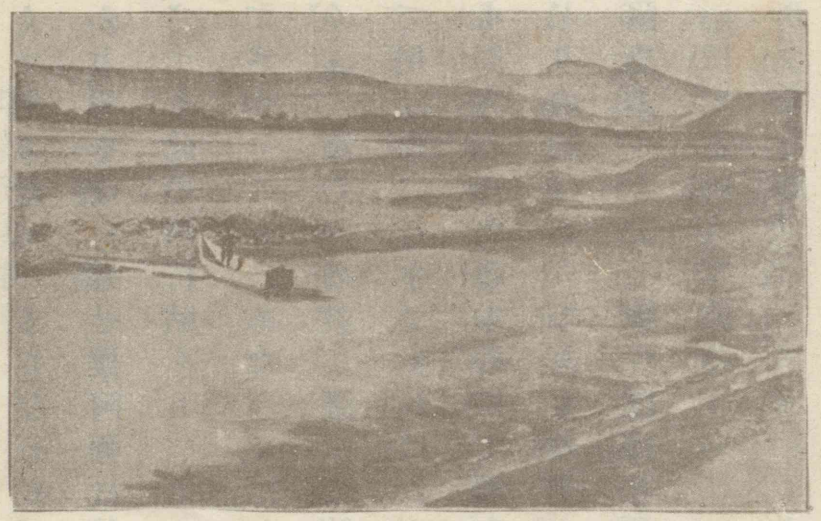


大井川の昔

金谷との馬かた、川ごしを一味にして、淺き瀨をかくして深き所を通り、わざとふしまろびなんどして、腰につくばかりの水にも、二十疋三十疋の錢をとる。まして水の深き時は、其の賃限りなし。水のある時分ならば、島田・金谷に宿をとり、川越しの直段をきはむべし。川ばたに行きかゝりては殊の外に賃高し。







大井川の今

中にも出家・町人・伊勢詣には、なほも直段高くとるなり。今まこと大水ならば、宿に逗留すべし。然るにこの程は日和打續きて雨降らず、水は定めて少なかるべし。今夜島田に泊りて、大河を前にかかへんこと然るべからず。もし川上に雨ふり、夜の間に水まさらば、くやしからん。道は只一里なり。金谷にこ

えて泊り給へ　くたびれ給はば馬にめせ。」とて、島田にて馬をかり、男をば打乘せ、樂阿彌は徒歩にて行く。

「さても此の川に鮎あり。水の淺き時は、鵜繩を川上より引いてさがり、これにあたりてはねあがる鮎を、大狹網をもつてすくふ。津の國の鼓が瀧にて鮎を汲むが如し。」などうち物語りて、川ばたに行きて見れば、おもひのほかに水おほし。されども馬方心得たるものにて、瀨を尋ねてわたす。樂阿彌も、「からじりの馬はあぶなきものぞ。わきを見れば眼のまふものぞ。眼をふさぎよく鞍つぼにとりつき給へ。」と、男に力を添へて、「ほいほい。」というて渡るうちに、いつの間にか樂阿彌坊は行方しれずなりぬ。

津の國の鼓が瀧　摂津國有馬郡にある、有馬温泉第一の勝景といはる。懸泉三十六尺

男は馬に渡され、馬子諸共に岸にあがりて、「これはそも御坊の流れ給ひけり。」とて、川下を見れば、一町ばかりの程に、何とは知らず黑きもの、浮きつ沈みつ、見えつ隱れつして、やうやう岸の上に這上りたるをみれば樂阿彌なり。「いかに。」と問へば、「されば、こそ、水底を流るゝ石に躓き、ころりとまろびたれども、水心を知り侍れば、立泳ぎ臥泳ぎなどしてあがりぬ。」とて、ぬれかたびらしぼり、章魚からげに裾をからげて、金谷をさして行く。

（淺井了意―東海道名所記）

淺井了意　京都の人。著作家。寶永六年歿、年七十歳



## 一四　燕

明治天皇御製

芭蕉門人、蕉門十哲

エノモトキカク 榎本其角

ハットリランセツ 服部嵐雪

モリカワロロク 森川許六

カガミレコウ 各務支考

コウノキヨライ 向井去來

オチトウジヨウシウ 内藤丈草

カワヒセツラ 河合曾良

タノダカシ 志田野坡

エチゴヒト 越人

ヒヤクリ 百里

ヒヤクヤ 百夜

ヒヤクセツ 百雪

ヒヤクヤ 百也

ヒヤクヒ 百尾

ヒヤクリ 百里

ヒヤクヤ 百夜

ヒヤクセツ 百雪

ヒヤクヤ 百也

ヒヤクヒ 百尾

立花北枝

燕とぶかげのみ見えて田植時

家に人なき小山田の里

燕は春分に飛來り、雁は春分に翔り去る。同じ鳥ではあるが、たがひに季節を期して袂を分つといふことは、面白い約束である。

燕來る時になりぬとかりがねは

くに思ひつゝ雲がくり鳴く　（萬葉集）

其の雁と燕とが途中で出會うた。

燕は鄕國の便りを雁に聞き

愛鄕心に富んでゐる燕である。

私は雲雀の快活を愛し、鶯の溫雅を懷かしむと共に、我が燕の敏捷を賞讃する。彼が全速力を出す時には、一秒時間に何町とか驅けるといふことである。

あそぶとも行くとも知らぬ燕哉　去來

つばくらや御堂の太鼓返り打ち　也好

つばくらや朝起きなれし八軒屋　烏西

春の夕ぐれ、野に出て見ると、燕が群を成し渦を捲いて飛びかうて居る。誰やらの句に、

入口に燕群れゐる小村かな

平和なる首夏山村の情景、見えるやうである。すうッと飛んでひらりと身をかはすところから、

ゆきゝてひらりとかへす燕かな　子規

去來　姓は向井、名は兼時、號は落柿舍、蕉門十哲の一、寶永元年歿、年五十四

也好　安永・天明頃の俳人

烏西　明和・安永頃の俳人

子規　名は常規、別號竹の里人、獺祭書屋主人、明治新派俳諧の爲に力めた人。明治三十五年歿三十六歳

燕は物覺えのよい鳥で、毎年巣くふ人家の軒をば、容易に忘れないといふことである。農家では梁に巣籠りをこしらへて、首を長くしてこの鳥の來訪をまつてゐる。どんなに土間を穢されても、顏を顰めないのみか、若し訪問しない年があると、老人などは殊に案じ顏である。是は一つには、この鳥が人家に取つての恩人であるに因る。政府でも保護鳥として捕ることを禁じて居る。

「燒野の雉子、夜の鶴。」といふが、此の燕が子雛を育てる有樣は、人の子にかぎりない感銘を與へる。殊に子雛の翅がやう〳〵黑く伸び、巣から飛立たうとあせるのを、親がおしなだめながら、自らあたりを舞廻つて、飛揚の態を敎示するあたり、何とも云へぬ感じを湧かしめる。斯樣な日が凡そ一週ばかりつゞくと、いよ〳〵實地の飛行試驗で、長男から一羽づゝ順に、先づ天井のあたりを飛翔せしめ、馴れるに隨つて、庭から屋根のあたりまで、手を取りながら飛廻るのである。自分はしみ〴〵と親のなさけを省みた。

燕はまた貞操の鳥である。昔さる所に年頃の娘が居つた。彼の女は慈悲深い親のすゝめに依つて聟を貰つたが、ふとした病が基となつて、夫は亡き數に入つてしまつた。泣明かした娘の瞳は、容易に晴れやかな色を見せなかつた。親は色々になだめ慰めながら、やがて再び夫を迎へさせて、其の悲歎を和げようとした。これを聞いた娘は、

「おなさけのほど身に泌みてうれしう存じますけれど、えにしなければこそ、あの方とながの御わかれとはなつたのでこざいませう。どうか此のうへの御なさけでございます。私に生涯亡き夫の菩提を弔はせていたゞきたう存じます。」

泣く〳〵父に訴へたが、父はいつかな聽入れず、

「汝の申す條、一應は尤であるが、それでは、明日をも知らぬ父をどうしてくれる。行く末短い父に、早く初孫の顏を見せるが孝行といふものぢや。」

すると娘は重ねて、

「さらば父上、只今此の軒に巣くつてゐます燕の雄を亡きものにして、雌に目じるしを附けて放ち、若し此の燕が來年他の雄燕と連立つて軒に歸りましたなら、其の時には私も父上の御意に從ひませうほどに……」

父は娘の乞ふがまゝに、本意なくも雄燕を亡きものとし、雌燕の頭に赤い糸を結んで放してやつたが、ひと歳經つて其の雌燕は只一羽甚だ窶れて戻つて來た。そこで父親も意を翻して、娘の決意に任せたといふことである。

語らはん友にもあらぬ燕すら
遠く來るはうれしかりけり　香川景樹

新綠の色のとゝのふ頃、初燕の聲を聞くのは實際うれしいものである。

人だにも忘れはてたるわが宿に

香川景樹
京都の歌人、桂園と號す。天保十四年歿七十六歳

かへる燕のあはれなるかな　熊谷直好

落ちぶれた人の身には、殊に深く感じられるであらう。

すく〳〵と生立つ麥に腹すりて
つばめ飛びくる春のやま畑　橘曙覽

生き〳〵とした元氣が胸に溢れて來る。（天野藤男―四季の田園）

**熊谷直好**　周防岩國の人、後大阪に住す。香川景樹の高弟。文久二年歿、歿八十一歳

**橘曙覽**　越前福井の歌人、國典を研究し、最も萬葉集に通じた。明治元年歿、五十七歳

**天野藤男**　著作家

## 一五　舟路

海にして　ひゞく艫の聲
水を擊つ　音のよきかな
大ぞらに　雲はたゞよひ
潮分けて　舟は行くなり

しづかなる　空にすかして
波のいろの　青きを見れば
みなそこや　果も知られず
ながれ藻の、　浮きつ沈みつ

みどりなす　草のかげより
わき出づる　泉ならねど
おのづから　みち來る汐は
うなばらの　うちに溢れぬ

さながらに　とほきしらほは
むれをなす　まきばのひつじ
吹きおくる　かぜに飼はれて
わだつみの　野邊を行くらん

雲行けば　舟もしたがひ
舟行けば　雲もまた追ふ
空と水　相合ふかなた
もろ共に　けふの泊へ

（島崎藤村―藤村詩集）

島崎藤村
詩人、小說家



## 一六　平和條約

六月二十八日
・大正八年

市街
パリの市街

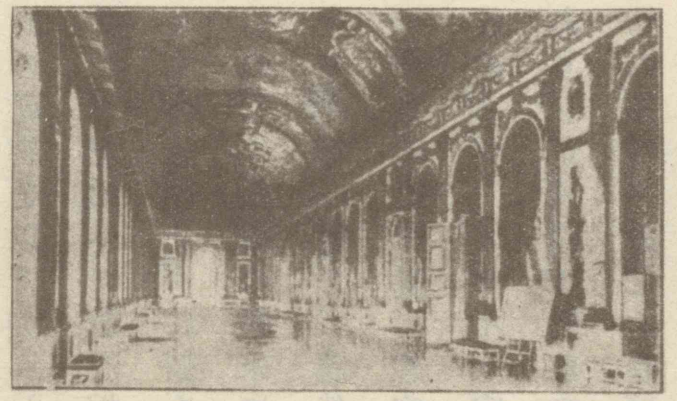
ビーブ、ラ、フランス
佛國萬歲の意

ヴェルサイユ宮
パリ市の西南十一哩ヴェルサイユ市にある宮殿。世界一の美しい宮殿といはれてゐる

六月二十八日、朝來暖煙輕く揚りて、曉風爽かなり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組となき行列、ビーブ、ラ、フランスを唱へて旗を振りつゝ市中を練りあるき、自動車の如きも亦思ひ〳〵に裝を凝したり。憶へば過去五箇年の間、砲彈の音に、敵機の襲來に、心膽を寒からしめし事そも幾度ぞ。今や乾坤一轉して、藹然たる瑞氣の搖曳するを見る。巴里人の今日の喜や、實に、想察するに餘ありといふべし。

此の日ヴェルサイユ宮附近の混雜は名狀すべからざるものありしが、宮殿正門前の大通は箒目正しく掃き淸められて一切の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めず。兩側に堵列せる共和衞兵の、銀色の兜と白き鹿革のズボンと黑く光れる長

靴とは、光彩陸離として莊重なる此の日の儀式をいやが上にも莊重ならしむ。午後三時、各國全權委員は皆已に入場し、招待を受けたる人々及び新聞記者等も亦處狹きまでに詰込みて、さしもに廣き鏡の間も、些の餘地だになかりしが、今は近世の歴史に最も光輝ある儀式を前に控ふる事とて、流石に咳一つ聞えず、滿場靜まり返れり。



ヴェルサイユ宮殿鏡の間

見渡せば、庭園に面して置かれたる長き卓子の中央には、クレマンソー氏例の如く椅子に深く腰

クレマンソー　當時のフランス首相



をおろし、向つて左にはウィルソン大統領を始として米國委員、次に伊太利委員、次に白耳義委員あり。又ク氏の向つて右にはロイドジョージ氏を始として、英本國委員、次に英植民地委員、次に我が日本の委員西園寺公爵を始め、順次に居流れたり。何れも黑のフロックコート姿にて華麗眼をそばだてしむるものとては一も見當らざりき。更に眼を轉じて窓外を望めば、正面の有名なる噴水池の周圍には、共和衛兵圓陣をなして整列し、其の背後には、特に今日に限り庭園まで入るを許されし幾千の人々堵の如く並びて、調印の終るを今や遲しと待構へたり。

午後三時を過ぐる事五分、向側の扉は開かれて、滿場の視線一

ウイルソン　當時のアメリカ大統領

ロイドジョージ　當時のイギリスの首相

時に其の方に注がるゝや、やがて、二名の獨逸委員は幾多の佛國將校に見守られつゝ入場し來れり。先なるは新外相ミュラー氏にして、後に續げるはベル氏なり。何れもフロックコートを着し、稍俯向き勝に極めて物靜かなる態を粧ひつゝ日本委員の隣なる定めの席に着けり。

席定まるや、クレマンソー氏は徐ろに起ちて、先づ獨逸委員より調印すべき旨を告ぐ。茲に於て獨逸委員等はやをら起ち上り、案内せらるゝ儘にクレマンソー氏の直前條約の正文を置かれたる卓子の前まで歩を運べり。

彼等は平靜にして殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以て前に進み、代る〳〵條約の正文に署名したり。其の間





ウイリヤム老帝　ドイツの英主(1797-1888)
ビスマルク　ドイツの大政治家(1815-1898)
モルトケ　ドイツの名將(1800-1891)

僅か二三分時のみ。嗚呼幾百萬の人命と幾千億の財貨とを犧牲として漸く贏得たる最後の結果はかくの如きか。獨逸の運命はかくして定り了んぬ。見よ、自席に歸り行く二人の黑き姿の淋しくも憐なるを。之を彼の五十年の昔同じ此の大廣間に於て、ウィリヤム老帝がビスマルク・モルトケを始め雲の如き賢臣名將に圍まれつゝ、獨逸國の帝冠を頂き、威風堂々として四邊を壓倒したりし當時と對比し來れば、何人か心中無限の感慨に打たれざるものあらんや。

獨逸委員の座に復するや、ウィルソン氏先づ座を立ち、續いて四名の米國委員之に從ひ、同じ卓子に至りて署名せり。次にはロイドジョージ氏を先登として英本國委員、次に英植民地

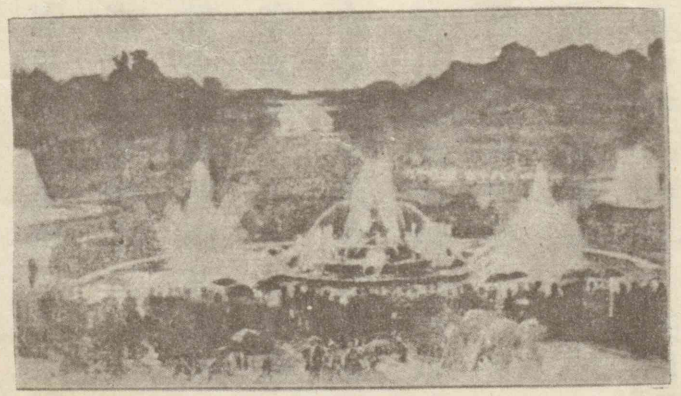
委員、次に佛國委員、次に伊太利委員、次に日本委員の順序にて、各一團づゝかはる〴〵其の卓子にをいて署名し、かくて最後のウルグァイ委員に至るまで、時を費すこと四十三分、調印を了したる國々は、山東問題に關する要求の容れられざりしを理由として之に加らざりし支那を除き、凡て二十六個國、調印の全く終りしは午後三時四十九分なり。

ウルグァイ　南アリカ洲にある共和國。

山東問題　我が國がドイツの租借地を受繼いで經營してゐる山東省の青島を支那に還附するについての問題

是に於てクレマンソー氏肅然として起立し、莊重にしかも簡單に宣言して曰く、「平和は今や成れり。」

ヴェルサイユ宮殿大噴水



と。此の時世界に類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一齊に迸り出で、殷々たる百一發の祝砲は宮殿の内外に蝟集せる幾千萬の人々の歡呼の聲と相應じて、新なる世界の出現を祝しぬ。

（近衛文麿―戰後歐米見聞錄）

近衛文麿　公爵。講和全權委員隨員

## 一七　信濃路の旅　その一

上野より汽車にて横川に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳え聳えて、天も高からず。樵夫の唄、足もとに起つて、見おろせば蔦かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見かへるに、山又山峨々

横川　群馬縣碓氷郡臼井町にある驛。上野から八十一哩半

碓氷峠　信濃と上野との境にある峻嶺。二十六個のトンネルを以て汽車が通じてゐる

として、路いづくにかある。寸馬豆人といへるは、かれかとばかり疑はれて、

つづら折、幾重の峯をわたりきて
雲間にひくき山もとの里

日もやや暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず、かけ上る駒の蹄に、蹈散らす雲霧のあはひを見れば一歩の外は、削りたてたる嶮崖の底もかすかにて、いとおそろし。登れども登れども窮る處を知らず。山ます〳〵高く、雲いよいよ低し。

見あぐれば信濃につゞく若葉かな

輕井澤はさすがに夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに、一重の

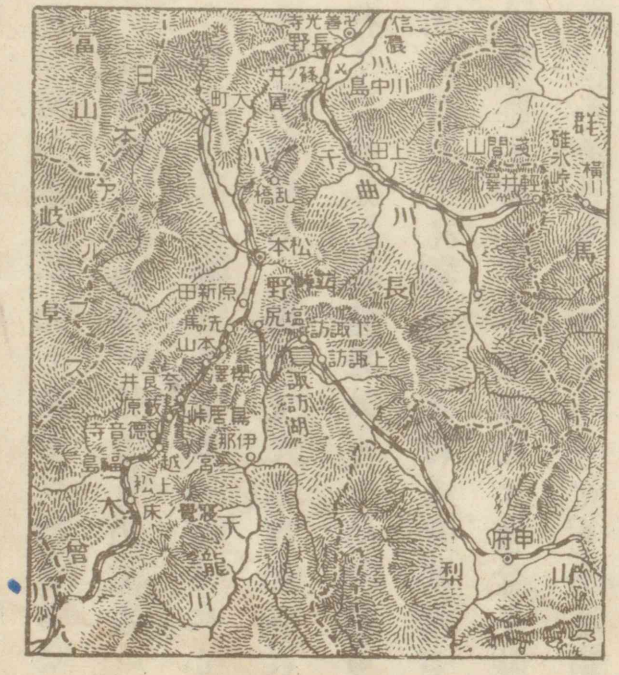
**輕井澤**　長野縣北佐久郡東長倉村にある地。避暑地として別莊が多い



旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起きいでて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を繞らして、草のみ生茂りたれば、其の色、染めたらんよりも麗し。

山々は萌黃淺黃や
ほととぎす

淺間は雲に隱れて、煙もいづこにたち迷ふらんと思はる。汽車を驅りて、善光寺に詣で、また川中島を過ぎて篠井までたち戻る。古戰場はいづくのほどと




**善光寺**　長野市にある三國傳來の阿彌陀如來をまつる

**川中島**　犀川と千曲川とに挾まれた土地。上杉謙信と武田信玄との古戰場

も知らねど、山と山とに圍まれて、犀川の廻るあたりにやあらん。河の水はいたく痩せて、ほとりの麥畠空しく赤らみたり。

日はくれぬ雨はふりきぬ旅衣
袂かたしきいづくにか寢む

次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催して辿り行けば行くて遙かに山重なれり。野の狹う尖りて、次第々々に入る山路けはしく、弱足にのぼる馬場峠、さても苦しやと休む足もとに、誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねばや、こぼるるばかりなり。少し上りて、とある樹蔭の葭簀茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を四五町の麓に汲みてもてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹のかげ



一河のながれとや、ひじりの教も時にあうてこそ有りがたけれ。

此の夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとゞむ。隣室の雜談に夢覺されて、つとめてこゝをたち出づれば、はや爪先あがりの立峠、旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乘れとの勸め、ありがたや、乘りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠は、なにとて苦しみし。路の邊に咲く白き花を何ぞと問へば、「これなん卯つ木と申す。」といふ。いとうれしくて、

むら消えし山の白雪來て見れば
駒のあがきにゆらぐ卯の花

峠にて馬を下る。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗取

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田まで三里の道を馬車にちゞめて、洗馬まで辿りつき、饅頭にすき腹をこやして、本山の玉木屋に宿る

本山　長野縣東筑摩郡。洗馬の南一里弱

## 一八　信濃路の旅　その二

櫻澤　本山から二里

本山を出で櫻澤を過ぐれば、こゝぞ木曾の山入。山のけしき水の有樣はや尋常ならぬ粧にうつゝをぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳に立ちて珍し。

桃源　支那湖南省にある仙境

奈良井の茶屋に息ひて、茱萸はなきか。と問へば、茱萸といふものは知り侍らず。珊瑚實ならば、背戸にあり。といふ。山中に

奈良井　木曾谷の北口をなす村



珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはり茱萸なり。主人の女房、親切に採りてくれたり。峽中第一の難處といふ鳥居峠、は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力に、面白う攀上る。

鳥居峠　奈良井から廿町藪原へ二十五町、御嶽神社の鳥居を頂上に立てゝその遙拜所とする

馬の背や風吹きこぼす椎の花

藪原　西筑摩郡

頂にて馬を下り、つく〳〵四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷深くして、樵夫の小徑微に隱見す。珍しく晴れわたりたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原の驛なり。或家にたち寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈はいよ〳〵せまりて、かぶせかゝらん勢怖しく、奥山の雪を解かして清らかなる水は、谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のたゞ中に、大なる岩の一つ突きいで

たる上に、年ふりたる松の枝おもしろく、龍にやあらんと思はれたるもをかし。宮越（ミヤノコシ）の村はづれにイみて待つこと半時、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞあらはれ出でたる。笠をぬぎて慇懃に德音寺の道を問ふ。翁のいふ、「さてもやさしの若者や。旭將軍のなき跡を弔はんとてやこゝまでは來給へる。こゝに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の跡なれ。このわたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名殘なるものを、今は桑の木ばかりぞ秀でたる。」と、一つ一つに指さす。そゞろに古を偲ぶ言葉のはし、この翁、謠ならば、かき消すやうにうせぬべし。日照山德音寺に行きて、木曾宣公の碑の石摺一枚を求む。この前

宮越　藪原の南二里

德音寺　壽永年間の建立。義仲の位牌をまつる

旭將軍　木曾義仲

木曾宣公　義仲の法名は德音寺院殿義山宣公大居士



の淵を山吹が淵・巴が淵と名づくとかや。福島をこよひの旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日、朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて、書流す句に、

折からの木曾のたびぢを五月雨

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、又降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き行きて棧に着きたり。見る目危き兩岸の岩は、數十丈の高さに削りなしたるさま、一隻の屏風を押立てたるが如し。神代の昔より蒸し重なりたる苔の、美しう青み渡れるあはひ〳〵に、何げなく咲きいでたる杜鵑花の麗

福島　宮越から二里　木曾谷中第一の町

棧　福島と上松との間にある

しさ。狩野派の畫にやあらん土佐畫にやあらん。下を覗けば、五月雨に水嵩増したる川の勢、渦まく波に雲を流して、突きては割れ當りては碎くる響、大磐石も動く心地して、うしろの茶屋に入り、床几に腰打ちかけて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしはやまず。蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るに、わが身も空中に浮ぶかと疑はれ、足の裏ひやひやと覺えて強くもえ踏まず。通り來りし方を見渡せば、こゝぞ、棧のあととおぼしきも、今は石を積み固めたれば、固より往來の煩もなく、只蔦かづらの力がましく這ひまつはれるばかりぞ古の俤なるべき。

むかしたれ雲の往來の跡つけて

**蕉翁**
元祿の俳人、松尾芭蕉のこと。芭蕉は旅行を好み諸國に記念の句を殘してゐる。こゝの句は「かけはしゃ命をからむつたかつら」

上松
浦島から二里半
寢覺の里
上松から半里

わたしそめけん木曾のかけはし

上松を過ぐれば、程もなく寢覺の里なり。寺に到りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指ざして、「こゝは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川のたゞ中に松の生ひたる、大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押したてたる岩を屏風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、こしかけ岩、俎岩、釜岩、硯岩、鳥帽子岩など申すなり。」と、いと殊勝氣にぞしやべりける。誠や、こゝは天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん。岩石は峨々として高く低く水に臨み、凹めるところは渦をなし、逼れると

ころは瀧をなす。いかさま仙人の住處とも覺えてたふとし。

（正岡常規ト瀨祭書屋俳話）

正岡常規　六五頁子規の註を見よ

嵯峨　山城國葛野郡太秦附近以西嵐山に至る汎稱

## 一九　村岡局

村岡の局は名を矩子といひて、京都の人津崎元矩の女なり。天明六年、嵯峨のほとりに生れ、八歳の時、始めて近衞家に仕へけるが、年長ずるまゝに、よろづに賢くまめやかなるより、擢んでられて老女となり、村岡と稱せり。天性いと嚴かにして愼み深く、殊に勤王の志に篤く、いたく王室の衰へさせ給へるを悲しみ、常に志ある人々と親しみ語らひて、「國のためには身を失ふとも厭はじ。」といへりとなん。

近衞左府　近衞忠熙

水戸中納言　德川齊昭

九條關白　九條尙忠

井伊大老　井伊直弼

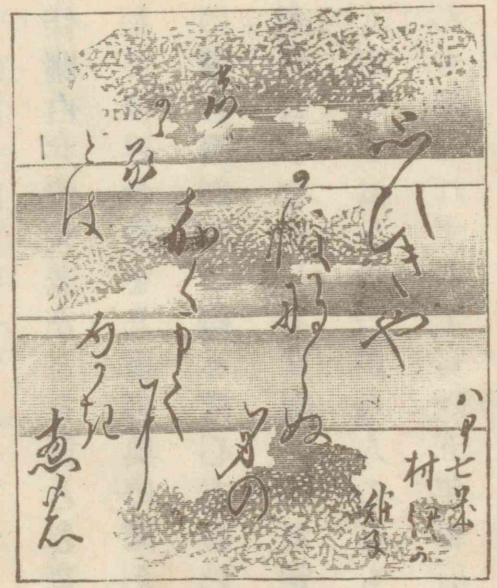
家定　德川十三代將軍

嘉永・安政の間、開國鎖港の論こもごも起り、互に挑み爭ひて、世の中漸く騷がしく、正議黨は近衞左府・水戸前中納言などを戴き、鎖港の說を唱へて、よそながら朝議を輔け奉り、開國黨は九條關白・井伊大老などを首とし、幕府の議を贊け成し、如何にもして世界の樣を九重の奧に聞えあげ、勅許を得て外國と交易の道を開かんと、樣々に心を盡しけり。かゝる折柄、時の將軍家定公子なくして、世嗣いまだ定まらざりしかば、此の事はやく定めずば、おのづから人の心も動きて、安からぬ事の出でこんも測られずとて、安政五年、幕府にては世子を選み定むべき評議起りぬ。時に水戸の臣に安島帶刀、同京都留守居役に鵜飼吉左衞門、其の子幸吉、其の外薩摩の日下部伊三次・西鄕吉之

助など聞ゆる輩あり。尊王の志深くして、攘夷の念自ら止め難く、いかで勅命を賜はり、水戸前中納言の子一橋慶喜卿を將軍家の世子と定め、早く職をつがせまゐらせて、前中納言、將軍の父といふを以て後見したまはんやうにし、攘夷の事を果し叡慮を安んじ奉らんと思ひ立ちけり。されども勅命を賜はらんこと容易き事にあらねば、「こは偏に近衛公を頼み聞ゆるに若かず、公をたのみまゐらせんには、村岡の力を借らずば恊ふべからず。」とて、まづ村岡を語ら

慶喜卿
齊昭の第七子一橋家を繼ぐ家茂の後を承けて十五代將軍となる。大正二年薨七十七歳

筆蹟
八十七歳村をか矩子
思ひきや數ならぬ身のかくまでにふかき恵の露かゝるとは



村岡局筆蹟

紀伊宰相
德川家茂

ひけり。村岡は固より勤王の志深く、君の爲には身をも棄てなんとまで思ひ入りたる頃なりければ、いと易く諾ひて、「しかじかの人なん侍る。」と聞えて、左府に見參せしめたり。左府は此等の人々を延見し、深く其の志を愛でて、いかにもして本意遂げさせんと心を盡されける程に、直弼等は早くも紀伊宰相を世嗣に定め、水戸中納言をはじめ、そを助くる人々を黜けければ、正議黨の心盡しは水の泡とぞなりにける。

村岡は之をいみじう口惜しくおもひて、更に一策を案じて、朝に奏しけるに、帝その志をめでさせたまひて、やがて乞ひ奉りしまゝに、水戸前中納言に勅諚を賜ひけり。日下部伊三次・鵜飼幸吉等、それを捧げて東に下り、密かに前中納言に傳へける

**間部詮勝**　越前國鯖江の城主、老中となる。明治十七年歿、八十三歳

**清水寺**　京都洛東清水にある。觀音堂

**月照**　清水寺成就院の住僧。玉井宗光の子、初名宗久。安政五年十一月薩摩灘に投じて歿した。四十六歳

に、隱れたるより顯はるゝはなく、此の事早くも幕府に聞えしかば、直弼、閣老間部詮勝を京に遣はし、勅諚の事に與れる輩を嚴しく探り求め、遂に鵜飼父子を始め、尊王攘夷を唱ふる輩數十人を捕へて、江戸に送らしめたり。時に安政五年十月にして、世に戊午の難といふもの是なり。

是より先、京都清水寺の僧に月照といふものあり、これも尊王の志いと深きを、近衞左府いたくめでて、常に近侍せしめられ、村岡も年來いと親しく語らひけり。然るに、「鵜飼等もろともに追捕せらるべし。」と告ぐる者ありければ、左府いみじう悲しみ惜しみて、西郷・村岡等に謀りたまふ。みな〳〵心をやましめけるが、やがて西郷が、「暫く身を潛めて時を待たるべし。外にはすべも候はじ。」といふまゝに、偏に彼に打任せて、しばし鹿兒島に隱れて、事をさまるを待たしめ給ひける程に、かしこにても幕府の追捕きびしくして、え潛みあへず、同年の十一月に遂に薩摩潟の藻屑となりにけり。

その明年正月ばかりに、京都町奉行の廳より、村岡を召しければ、いかなる事ぞとて、直ちに行けるを、其のまゝにとゞめられけり。これも亦正議黨に與せし咎なりけり。さて二月の末つかた、江戸に送られ、又の月、松平丹波守の館にあづけられぬ。秋になりて、鵜飼等もろともに、白洲とか、ゆゝしき處に引出でられて、鵜飼等を助けて、勅諚下賜の事を贊け成しし罪を責め問はれけれども、村岡少しも恐れたるけしきなくて、「何事も、老

のけのあさましさに、悉く打忘れたり。」とのみにて、何事を問へど、さらにいはねば、司人たち困じはてて、更に、「汝が主なる左府殿には、日ごろ何事をして明し暮し給ふ。」と問ひしに、「女の身は外様の事は知らず。」といひて答へざりけり。これ皆主家に煩をかけじとの心しらひなるべし。司人また、「左府殿には、此の頃とかく政にたづさはり給ふと聞ゆるはまことか。」と問ふに至りて、村岡は容を更めて、「あやしくも問はせたまふものかな。近衛殿は藤原氏の長者にて、官、は左大臣におはしますを、國の政にあづからせ給ふは言ふもさらなり、さのみいぶかり給ふべきかは。」と理りせめて詰りければ、司人返すべき言葉もなくて止みつ。

大御臺所
將軍家定の夫人

さて日頃經て、いよ〳〵罪科定まりて、三十日ばかり籠められけり。其の程はかしづきあまた附けられて、衣裳なども六日七日毎に新にとゝのへて着せられけり。さるは時の大御臺所入輿の折、村岡よろづ後見まゐらせしかば、之に報い給ゝるなり。かくて九月に至り罪免されて、十月京に歸り、又もとの如くに近衛家に仕へたりけるが、慶應二年、老いて今は宮仕もなりがたしとて、里にまかりて、嵯峨の奥に直指庵といふ庵を結びて、いみじう行ひて住みゐたりし程に、明治五年、太政官より其の王事に勤めたる績を賞し、終身現米二十石を賜ふ由仰せ下され、のどかに老をやしなひ、貧しき人を惠みなどして、樂しく月日を送りけり。

此の間に、西郷隆盛がしば〳〵此の庵におとづれ來りて、過ぎにしかたを語らふことあり、或時は懷舊の涙に袖をしぼり、或時はをさまる御代にあひぬるを喜びつゝ、八十路の坂を越えても、猶すこやかなりけるが、明治六年八月、八十八にて身まかりけり。後に、尊王を唱へて王政復古の基をたてける人々に、位階を贈らせ給ふ事あり。村岡も明治二十四年十二月に、從四位をぞ贈られける。

（日本の婦人）

## 二〇　夏の草花

夏は風も親しむべし。さはいへど、なほ草花の咲誇れる庭園こそ嬉しけれ。葎・蓬といふだに、なほ我が身の程の花は咲くなり。天の愛で培へる花に、いづれか優り劣りあるべき。親しみて見れば、花といふ花にはそれ〴〵愛づべき節の見出さるゝも面白し。

赤豆隱元といふを、彼岸の頃三つ四つ土にふせて置きつるに、六月の中頃よりのび〳〵と成長し、蔓には赤き花をつけたり。いと愛らしき花なれば、毎年之を植うるに、今は庭に無くてならぬもののやうになりたり。

蔓ある草は優にやさしう覺ゆるものぞかし。自然薯といふ芋を、人の贈り來りしことありき。あまり細きがありしかば、垣の根に植ゑて置きしに、零餘子（ムカゴ）あまた實のりて落ちつるが、此處彼處と今年はあまた生出でぬ。竹を添へてやれば、這ひ

まつはりて茂りあひぬ。白き花の咲くべき頃もをかしかるべし。實のほろ〳〵と秋風にこぼれん程、いかにあはれ深からんと樂しむ。斯くふと蔓草を愛でおもふ心つきてより、瓢簞も植ゑにき、絲瓜も植ゑにき。のうぜんはれんのふりおもしろき、木通の延びんまゝにのびさせたる、皆とり〳〵にをかしかるべしとて、松杉などに添へて植ゑにき。

朝顔の花はさのみ愛で思はざりしが、今年は農事試驗場にいひ遣りて取寄せし芽生のいとも見事に、獅子など名をもつくべからん花の、一つ魁けて咲きたるもをかし。南瓜の轉がれる畠に、晝顔の花の、眞晝の照りはたゝく日かげを物ともせず、咲出でたるを見て、

伊東祐命　國學者、前田夏蔭等に學ぶ　明治二十二年歿

萬綠叢中紅一點　支那の王安石が柘榴を詠じた詩中の句

よられたる草葉の中に咲きにけり
つゆもたのまぬひろがほの花

と、伊東祐命大人のよまれし歌を思ひ出でぬ。

スウィートピーのほのかをれるもなつかし。去年の秋の彼岸に種を蒔きしが、大きく丈のびたれば、竹など添へてやるに、蔓のこれに縋りて、風にゆらぐもうるはし。今年の春蒔は、丈も低し葉色も惡し。「萬綠叢中紅一點」とうたひし柘榴も夏の庭には面白く、花も實もこは仙人めきたり。

仙人掌こそ面白きものなれ。冬は眠れる如くにして、夏になればいやがうへにも芽を出し、桃色・赤・黃などの花をつく。花は燃ゆるが如く匂へるに、我が上とも知らぬやうに、山の如く

冷かに立てる樣のをかしさよ。狹き庭を心ひろ〳〵と見渡して、花の品定めしつゝ、緣に腰打掛けたる程、昨夜の雨に萩の泥に塗れ伏したるを見出でて、「あな、あはれ。」と急ぎかき起せば、はや花の咲きたる枝もありけり。　木下幸文が、

露にふす萩の下枝かき起し
見れば花こそ咲きそめにけれ

と歌ひしをおもひ出づ。　かく其の人の歌などをおもひ出でて、同じ花にむかへば、さも其の人と對ひて語りあふ心地もするなり。　花に寄せたる人のこゝろは、今のも昔のもなつかしうこそ。

（三宅花圃）

木下幸文　歌人香川景樹の門人。文政四年歿、四十三歳

三宅花圃　名は龍子。雪嶺氏の夫人

## 二一　水あそび

春竹から東北水前寺に向ふ。　水前寺は少年時代から青年時代の初にかけて、吾が生涯に織込まれた明珠の樣な記念である。　三歳から十八歳の春まで、（内三年は京都に居たが）父母の下に余が住んだ家は、熊本の東郊大江村にあつて、水前寺へは半里に過ぎなかつた。　其處の芝生や芝山にころがつた小學校の運動會（出浮と其の頃は云うた）、其處の泉水に仕掛花火の朱の時雨が降り、火のランチュウが亂れ泳いだ出水神社の祭禮、ほとり近い砂取町の餡餅・餡燒、忘れ難い記憶の數々が此處には預けてある。　就中砂を分けてぶく〳〵と湧出る水の美しさは、眼から魂に滲みとほつて、余の水の洗禮は此の水前寺

春竹　熊本市の東郊外にある

水前寺　もと寺名であるが、轉じて地名の如く用ひられる。熊本藩主の別墅であつた戍趣園のこと

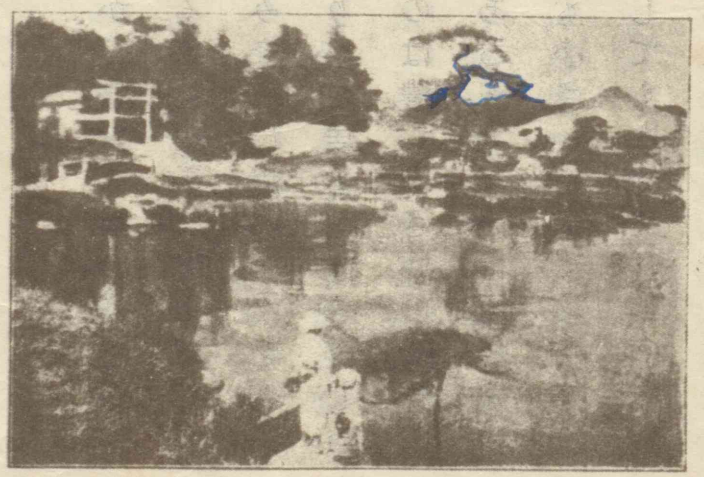
ランチュウ　金魚の一種、丸子ともいふ

出水神社　水前寺園内にある

で受けたと言うてもよい。熊本に育つた程の者で、水前寺を愛せぬ者は一人もあるまい。妻なども、六歳の年始めて連れられて來て、「此處に泊る。」と駄々を捏ねたと云うて居る。妻の父は非常な自然派で、水美しい砂取に住みたがつて、一度は地所まで見に來たが、果さないで熊本の市中に死んだ。武藏野に住んで居る余は、ともすれば此の美しい水を夢みる。

鶴子　著者の姪にして養女、此の時年八歳

車を下りて、十九年ぶりに此の水の園に踏入る余のこゝろは、一種のときめきを覺えるのであつた。鶴子とさきを爭うて、小走りに泉水の石菖のほとりに立つた。此處にも其處にもぶく〳〵と湧いて流れるのは、昔ながらの無色透明な、水晶を欺くるやうな美しい水である。しかし中島へ渡らうとすれば、飛石が傾いたり沈んだりして居る。中島にあつた大きな石の燈籠も見えぬ。幻滅の感は爭はれぬ。北を泉頭にやゝ窄く南を廣く、琵琶に象どつた此の泉水は、富士を筆頭に東海道うつし水の風景と、清淺の水とを、すべて東前一帶に集めて、西は下へ往く程深寺い水に樹木が影を映して居る。我等は北に折れ、石橋二つ渡つて出水神社前を過ぎ、富士の築山の脚高の土橋を渡る。此の邊には昔水中に砂寄せて、綠や紫の



琴子　著者の宅に出入した女學生

色美しい水前寺菜を作つたものだ。

富士の裾野を南の方へ行く。

やはり水だ、下りて飛石に蹲り、めだかが息つくかの様に、ぶくぶくと小さな泡の球を立てゝ湧上る水を兩手に掬んで、昔の味をなつかしむ。妻や鶴子、琴子も、みな石に跪いて水を掬びそれから手巾を出して顔を拭いたりして居る。此の美しい水には、あかりこ蟹が居る。大きいのは濃く、小さいのは鮮明な蝦茶の色をした可愛らしい蟹である。大きいので矮鶏（チャボ）の卵より小さく、小さいのは豌豆よりも小さい。子供の折には よく手拭に包んで歸つて、つけ焼にしてもらつて、かり〳〵食べたものだ。今も居るだらう。二つ三つ水中の石を起して覗く。そこには唯金絲の様な日影が、底の細かい砂にちらちら搖いて居るばかり、小さな這行く赤いものの影は一つも見えない。それは恐らく小さい日の余と共に逝いて、消失せたのかも知れぬ。物足らぬ氣持で、やゝしばらく水を眺める。

此の邊は鶴子の膝越さぬ淺さで、石に擦れたりする處に綿（ミンワタ）の襞を見せる外、日の下に見れば、有つて無いかの如く澄み徹つて殆ど音といふ音をさせないが、汀の石菖を撫で、數々の飛石を洄り、底の小砂の一粒だもまろばさないで、しかもすべての水は動いて居る、下の方へ流れて居る。ぢつと見てゐると、二秒置き三秒置きに、底の五色の砂を分けて、ぶく〳〵、ぶく〳〵と、小さい眞珠の球が續けざまに上つて來ては、ぱつと水面に

消える。飛石の此處ばかりかと思へば、上にも下にも。ぴたりと止んだと見ればまたぶく〳〵。彼方が消えたと見れば、此方がぶく〳〵。ある時は一齊に拍子を揃へて、ぶく〳〵、ぶくぶく。嬉しくてたまらぬげな水の樣である。子供の笑、少女の噱出(フキダシ)、幸福のつく息でなくて何であらう。永久に若い自然の歡喜が、こゝにも母なる地の懷から溢れて居るのだ。立上り、芝生の路を傳うて、南に泉水の尾へ行く。狹からぬ此の泉水に湧出る程の水は、琵琶尻の此處に落ちよつて、土橋を潛つて三間程の川になつて居る。底は見えすいて居て、大人の丈も立たぬ程深く、さばかり音を立てぬが、箭を射る樣な水勢を物の數ともせぬ鮠(ハヱ)・いだの類が、群をなして泳いで居る。此の土橋から飛んで泳いだ昔の夏を憶ひ出す。流の眞中に水を二つに裂いて突立つ一叢薄の巖は、以前より餘程瘠せた。流の向ふに、一軒水に挾まれて凉しげな旗亭が見える。土橋を渡り、今一つ亭前の細流に架けられた小板橋を渡り、客一人も無い座敷にあがつて、午餐を命ずる。今日は十月六日、併し南國の日は熱して、氷を思ふ日の午である。水の欲しい我等は、水に挾まれた座敷に、存分水見の饗にあづかる。東表は泉水尻のかの本流ではないが、他の小さな泉川が咽を鳴らして走つて居る。裏の方には、大泉水の玄孫とも云ふべき、別に一泓の泉池があつて、木立の蔭深く、水も中々深さうだ。湧出の量も多く、かの清淺のかはゆいぶく〳〵に引換へ、拳大の泡球

が底の方からぼこ〳〵盛上つて來ては、ぐる〳〵ッと云ふ響を立て、林影幽かな水面にぱつと散つて、尋常の水になると、さつと下へ流れ出て行く。居常水に渴して居る武藏野の遊子、緣に足なげだして、飽かず水の踊を眺める。（徳富蘆花―死の蔭に）

徳富蘆花　名は健次郎。小說家、文章家

## 二二　蚊やり火

落合直文

蚊やり火に筆のさやをばたきながら
　君とすゞしき月を見るかな
窓の外に竹二もとを植ゑにけり
　今宵は月もまちて眺めむ

落合直文　號は萩の家。國文學者、歌人。明治三十六年歿、四十三才



佐々木信綱

鐘の聲さぎりに消えて天地に
　いたり渡れる夜の色かな
秋の風林に吹きぬ白雲の
　をちかた人はおとづれもなく

金子薫園

なき人は御齒よわかりき蓮の葉に
　もるこの飯よやはらかにせん
鳥のかげ窓にうつらふ小春日に
　木の實こぼるゝ音しづかなり

尾上柴舟

佐々木信綱　文學博士、東京帝國大學講師。國文學者、歌人、號は竹柏園

金子薫園　名は雄太郎。歌人

尾上柴舟　名は八郎。東京女子高等師範校教授、國文學者

與謝野晶子
鐵幹氏夫人。文學者、歌人

砂山を一つ越ゆればそなれ松
　まばらに見えて秋の風吹く
小羊の靜けき夢や守るらむ
　牧場にひくき夕月のかげ

與謝野晶子

絽の蚊帳の波の色する透影に
　松千もと見るありあけの月
汀來る牛飼男うたあれな
　秋の湖あまり淋しき

## 二三　風と露

一　風の音

草木が風を受けて、葉・枝又は莖が動いて一種の音を發したり又凪に木の葉が飛舞ふさまなどは面白く見える。

秋の野の芒の風に戰ぎ、河邊・湖邊・海邊などにて、荻・蘆・菰などが風を受けて、ざわ〳〵音のする時などは、至つて寂しい感情が起る。

秋の夕方、晴渡つた空に一點の雲もなく、またさしたる空氣の動搖もないのに、森や林の梢で何となく音がして、秋風のわたるのを知らせることがある。かの松風・松籟など云ふのもこれと同じやうなもので、別段に強い風も吹かぬに、松の梢では一種の音がする。これはやがて空には多少の風のあること

須磨　摂津國武庫郡にある
明石　播磨國明石郡にある

風新柳云々　和漢朗詠集にある句

八田知紀　舊鹿兒島藩士後、近衛家に仕ふ、香川景樹の高弟、明治六年歳、年七十五歳

を示すのである。須磨・明石の海邊、又は東海道五十三次の松並木などで、晴れた日の夕方、又は月の冴えた夜に、高い梢の上で松風の音のするのは、自ら一種の趣がある。昔から松風の音が吟詠の材料に上つたのも、尤もであると思はれる。

枝垂柳の風に靡く様を見ると、微風では多くの枝がそよ〳〵と一緒に動いて、「風、新柳の髪を梳る。」といふやうに優雅な趣がある。然るに暴風になると、恰も狂ひ騒ぐ鬼女の髪のやうに、東に舞ひ西に舞ひ、南に北に舞狂ふ。又一入の壯觀である。竹藪の風を受ける工合も、多少これに似て居て、風に逆らはずに動く有様に趣味がある。歌人八田知紀はかやうに歌うてゐる。

吹く風になびき〳〵て爭はぬ
こゝろや竹のみさをなるらむ　從順

## 二　露の玉

露は夏草に下りるもので、朝早く起きて叢の間を見ると、葉に綺麗に着いて居る。殊に稻・蘆などのやうな禾本科の植物、又ふき・やぶからしなどの葉の緣には、小さい水玉が規則正しく載つて居る。竹の葉の先にも同じやうに綺麗な露の玉が見える。

斯様に稻や竹の葉の尖端、又はふき・やぶからしなどの葉の緣に着く水玉は、空氣中の水分が凝集したのではなく、夜中、植物體の中に滲山に溜つた水が、葉の緣又は先にある小さい孔か

赤道以北3・半

ら外へ濾しだされて出てきたのである。植物の中から出る水は、何時でも葉の中の極つた部分に着く。葉の全面に銀色の小さい水玉が不規則に着いて居るのは、空氣中の水分から出來た眞の露である。

露に逢ふと、草が如何にも涼しさうに且新鮮に見える。熱帶の沙漠のある地では、雨は降らぬが、朝露が夥しく下りるから、植物がそれで水分を取ることが出來る。すべて露は夏のさかり、晝間熱く、夜から明方にかけて、溫度の急に下る時に多く出來るので、日中の熱さで萎れかゝつた葉や莖も、再びいき返つたやうになる。露は朝な〳〵清新の美觀を夏草に與へるばかりでなく、斯樣に植物の生存上にも大切な關係があるのである。

（三好學「植物生態美觀」に據る）

三好學
茨城縣の人。植物學者、理學博士、東京帝國大學理學部教授

奥州の西海岸
作者の故郷は羽後の國鶴岡町

## 二四　夕陽の美

夕陽の美は、西洋ではあらゆる美中の最も美なるものの一つとして數へられて居る。それで苟も自然の美に興味をもつて居る詩人は、口を極めてその美を歎美して居る。我が國の文學にも、夕日影とか夕映とかいふ文字は見えて居るが、其の崇高なる光景を想はしむるに足る一首、一篇だに有しないのは、聊か不滿足の感がある。

夕陽はすべて美しいが、中でも、海の夕陽ほど美しいものはあるまい。自分は奥州の西海岸に育つたものであるから、海の

日没の景色は、自分の頭に牢乎たる印象を留めて居る。あの夕の雲の、いろ〳〵のたゞずまひ、それに、はえうつれる夕陽の光の濃さ淡さ、それに伴うていろ〳〵に彩られる大海原、是等の一切が、日の傾くに連れて、形も色もそれ〴〵變つて行く有様、殊に大空の暮れてゆく色合などは、繪も筆も及ばない。海の夕陽に對して自分の起す感情は、常に「平和」である。譬へば世界のあらゆる障碍に打勝つた大勇者が、今方に其の最後の戰鬪を後にして、榮光と平和とに擁せられつゝ、靜かに、其の墓門に凱旋するといふ様な趣がある。夕陽の景色は、如何にも崇高ではあるが、其の全體の上に、何處となく疲れた老衰の趣がある。朝日の景色の、活き〳〵として、今將に戰場に上らんとする初陣の勇士の概あるに較べると、兩々相對して、さながら人生の兩極端を現示して居る趣があるではないか。

あゝ、人、その青年時代は朝日の如く、その晩年は夕陽の如くありたいものではないか。爭を經ない平和は平和とする價が無い。吾等は、一生の戰鬪に打勝ち、榮光の雲につゝまれて、靜かに西方の天に入りたいと思ふ。あゝ海の夕陽は美しいが、海の夕陽に似た人生の末路は、更に一層美しくはないだらうか。

（高山林次郎―樗牛全集）

高山林次郎　號は樗牛。文學博士。文章家、評論家。明治三十五年歿　三十四歳

年たち返り　慶和元年（一八四一）

## 二五　空行く雁

新玉の年たち返り、一萬は、九つ、箱王は七つにぞなりにける。

一萬・箱王
工藤家次
祐家
祐繼
祐親
祐泰
祐成（一萬）
時致（箱王）
祐經
母
名は滿江・祐泰の死後、曾我に再嫁した
曾我殿
太郎祐信
工藤一臈
即ち祐經
鎌倉殿
源頼朝

或夕ぐれ、箱王は、母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は、いづくにましますぞや。往きてをがみたてまつらばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたるこしかたも、今更おもひいだされて、消えいるばかり思はれて、母、泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が父にてあれ。」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王、かさねて申しけるは、「父御前は、まことやらむ、『狩場より歸り給ふ道にて、工藤一臈とやらむに射られ、死にたまひぬ。』と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。われらをも殺さむとや思ふらむ。われらがこの里に在りと知らでや過ぐらむ。」など、おとなしく語りければ、母よりはじめて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

この里
相模國足柄下郡曾我中村

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの、南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶつばさもみな、別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫にうまれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は、實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿

河津殿
祐泰

と申してありきとかや。　父だにも世におはしまさば、馬鞍を
も賜り、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなむ。
われ〳〵より幼き者にても、馬鞍・弓矢をもて、物を射ありくこ
との羨しさよ。　これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵
は父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顏をさし入れて、
さめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顏をあはせて泣きゐ
たり。　一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし。　人も
こそ聞け。　いかに、和上膓達、夜も更けぬるに、さやうにておは
するぞ。　とく〳〵入らせ給へ。」と、怖ろしげにいひければ、二人
のものは門外へ逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に
内に入りけり。　或時兄弟は、竹の小弓に薄矧の小矢を取添へ



て、遠侍に出でてあそびけるが、明障子のありけるに、二人立向
ひ、あなたこなたへ射通して、一萬、箱王に申しけるは、「われらも
いつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何
ならむ野山にてもあれ、親の敵祐經を、かくの如くさし合ひて
射取りて、とにもかくにもなりなむ。　和殿も弓よく射習ひ給
へ。　われも射習はむ。　弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」とい
ひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。　年ばへには怖ろ
しきことかなと人々思ひけり。
一萬が乳母此のよしを聞知りて、大きに驚きて母にかくと申
しければ、母も大いに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣く〳〵
語られけるは、「實か、おのれ等がさも怖ろしき謀叛を起さむと

伊東入道
祐親

千鶴御前
母は祐親の女

松河が淵
伊豆國田方郡伊東にある

石橋山
相模國足柄下郡

石橋山の戰
治承四年八月（一八〇）

土肥の杉山
相模國足柄下郡土肥の山谷
石橋山の南

梶原景時
頼朝の寵臣

議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に御敵となつて、先年伊東の館においては失はれ給ひぬ。おのれ等かゝる謀叛人の孫なれば、敵、左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時千度百度悲しむともかなふべきか。そのうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してとゞまりたり。その故は、鎌倉殿石橋山の合戰に打負けて、土肥の杉山へ入らせたまひし時、梶原景時と曾我殿と、二人心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆返しまゐらせて、『二人の幼き者どもを助けて給らむ。』と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それ程の志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ。』と仰せられける故にこそ汝等も安穩にて、今まで希有の命を保ちたるぞ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にても恩を知るとこそ聞け。況や汝等人倫においてをや。然るを却つて曾我殿に歎を與へむこと、返す返すも口惜しかるべし。その恩を報ぜむと思はば、速かに謀叛をとゞむべし。」と口説きたてて誡められければ、二人の子供、目と目とを見あはせ、顏うち赤めて立ちにけり。

それより後は人の聞かぬところにては內々談議しけれども、人目に顯はれては語り合ふこともなし。母も內々怖ろしき者どもの心樣かなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむ

とぞ思はれける。

（曾我物語）



## 二六　旅にある友へ

軒ばに山たゝよひ垣根に川ある住居は旅宿のしか
も主は且つ我が旅の好み子にて、いたはらるゝ事
うれしきなどとは、はかなきにはいへど聞きては
きのふの夕暮は雲の日の影に映えて、松風あはれなり
きゝつゝ時都の方思ひ出でられては
寝られぬとおもひやり給へかし
都は皆々さはりなく、何時もの時



めで給ひし隣家の琴の音はたれかれがりて聞え
めかしてすぎしかば、御出立の後まづ僅かなれ
へと御方の様に交りし事は、秋になりての御身
角に移りし様にかしく、隣にもの素れ行きける
女の方の隣家の人あるじは、あれは御前様は御見舞
給はかしとやうに、隣家と御住ひに移りしが
其の様方の着物に銭被ちしもの
して悉く持ち出させしは、ゆゝしき事に見え、さて
懐しと思ひし一しほ、物思ひの種に淋しく
なりて御会ひの事なれば

姉しきりに招待されぬ前の中夫が病乃
病をうる先日思ひし頂戴の歌集
見出でたる樣手を備へいとまの女子の
年ちうるなれども姉が例の文を
と所望せし傳物のなげを弾ず見
事にかしれ添ひなることいとく喜人の
喜一重に出すゆゑと存じ姉しも
日夜やうに出めざして物思ふ比
ふれたしを況して先の私の佛しき文集
をもうるふ出ゆゑ定めなれば行かん



しきりに日ふ出の重病中出でい姉より
笑ふ事一段出帰京は事年をゆく
の出ぬ年に書きたうゑ給へ出帰日
記稗見いとと樂みたの次の文
文いたの出便りなるべき甚だ程以を
紙をもてやて付百枚和紙の
げふ出風をもやく出用ひうまを
しき甚だ事一段ありて
（樋口一葉「通信書簡文」）

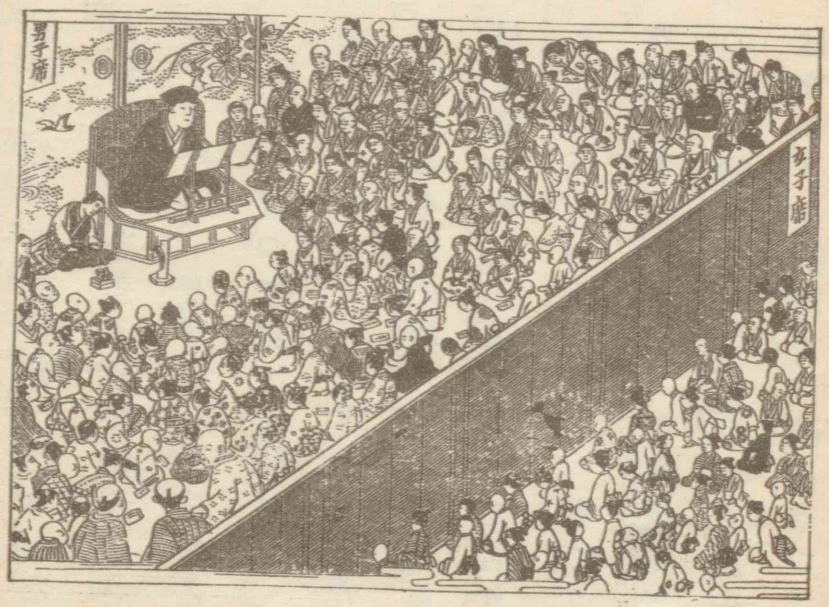
お年寄　町年寄。名主を管する

町役　町役人の略。名主・五人組等をいふ

## 二七　南京の壺

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役・家持の人々、一同に座に着きますると、さま〳〵の馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも醉ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりとも御取り下され。」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つてくる。座中も、「これはよいお心づき、ひらにお菓子をめしあがれ。」と勸めると、年寄もわるうはなし、「しからば頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色々にこじまはして見ても、引つばつて見ても抜けず。まご〳〵して居られると、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」「いや、手が少しつまりまして、思ふやうに抜けませぬ。」と、眞顏になつて云はれる。「それはお氣の毒、私が壺を持つて居りませう、無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向ふへ廻つて、壺をつかまへ後へ引くと、年寄は手を前に引く。互に「えいや」と引きあふ有様、景清と美保の谷が鍛曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなか〳〵笑はず、泣顏になつて、「どうも痛んで抜けませぬ。」と

景清・美保の谷　惡七兵衛景清と美保の谷十郎




**司馬溫公**
名は光、字は君實、溫公は諡。宋の名相

心學道話の席

いふ。さあ、これから大騒になり、「醫者どのを呼んで來い。骨接ではゆくまいか。」と、酒宴の興も醒めはてました。

時に、五人組が一人進み出で、「いづれもお騒ぎなさるな。われら承つたことがある。『昔、司馬溫公と云ふ人、幼きとき、大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに





遊びましたが、一人の小兒誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃歸つたが、司馬溫公ひとりは歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投げつけましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりました。』と、或人の話ぢや。今、お年寄の御難澁は、此の話に能う似てある。

いざや、われらが司馬溫公となつて、譬へば、その古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」としかつべらしく煙管をひつさげ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手をつき出すと、只一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖がちらかつて雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄お助りなされたか。」と、その手を見れば、拔けぬこ

そ道理。金米糖を一杯攫んでゐられたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。

攫んだものを放しさへすれば、自由自在に手は拔けたものを、一度攫んだら、首がちぎれても放すまいと、片意地な生まれつき。それで、自由自在の大安樂が出來ぬのぢや。かく申せば錢金の事のやうなれど、攫むものはこればかりではない。器量のよいのを攫み、賢いを攫み、負けをしみを攫み、家柄を攫み、身代のよいのを攫んで、放すまいとかづき歩くによつて、教を聞くこともならず、樂をすることもならず、愼も出來ず、せん方なさに、癪氣抑へたり、顏しかめたり、酒飲んで紛したり、さりとては氣の毒なものでござります。壺割つてしまうてからは、

柴田亭
號は鳩翁、道話の名家、天保十年歿、五十七歳

何と云うても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。

（柴田亭―鳩翁道話）

## 二八　世界の歌枕

大西洋の浪は、太平洋のとは稍〻違つてゐる。太平洋の浪は大きくゆるく打つ。大西洋のは、いつも天氣が悪い爲か、どにかく稍〻小さく鋭い。空の色の關係もあらう。其の色は澄んだ藍ではなくて、稍〻黑ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度稍〻高くなるに隨つて、浪の色淡く、大日の花やかさは異ならないが、夕雲の色彩も稍〻あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却つて美しい。

**桑港**
北米合衆國カリフオルニヤ州の都府、太平洋岸に於ける最大貿易港

私の大浪に遭つたのは、桑港に着く三日程前の一日であつた。小山の如き浪が寄返るので、さしもの大船も木の葉の樣に動搖したが、幸にも此の日は頗る上天氣で、風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味はふ事が出來た。大西洋の方は一體に山なす巨浪は少ないが、米國を去つて五日ばかりの一日は、暴風雨に類した天氣に出遭つた。要するに、海の景色は取出でて人に語る事は難いが、一度經驗のある者が後日追想すると、單調のやうでも、其の美は千變萬化である。これ實に究竟の歌枕。

布哇の椰子樹



**布哇**
北太平洋中にあつて十餘の群島から成るもと王國であつたが、今は北米合衆國の領となつてゐる首府をホノルゝといふ

**金門灣**
北米合衆國の西岸カリフオルニヤ灣入口の海峽。サンフランシスコ灣往來の關門

陸上の景色は土地に由つて著しい相違があつて、一般には言盡されぬ。布哇の如き四時氣候を同じうして、太平洋の樂園と稱せられる地に行くと、滿目の風光一變して、始めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萠黃の色に見えて、それに椰子の林が背景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも、實際の方がよほど美しい。これからの人が、歌枕の一つとすべき所だと思ふ。カピオラニーの公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下枝に放し飼の孔雀が止つてゐて、其の艶な羽毛が、花のやうであつたのを記憶する。

又桑港の港近くなつた海の上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる所から、遙かに眺めると、金門灣頭の大浪が港口に押寄

せる有樣、水の屏風を立廻した如く、海の上にも瀧があるかとも疑はれた。是はた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。熱帶地方は云ふまでもないが、歐米の風光は日本に比して、いたく趣を異にしてゐる。かの國には、我が國よりも草木が尠ない。見る山も見る山も、日本の樣には松杉が山全體を蔽うてゐない。あるは芝山の如く、あるは只岩石のみの樣な山の所所に、たま〳〵青々した樹木が十數本繁つてゐるといふ風の景色が多い。それで日本人は動もすれば、我が國の景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見方であつて、兩方ともにそれ〴〵の美しさがあるのは無論である。併しながら極めて土地の磽确としてゐるのは、勿論景色が好いとは云はれない。私は冬枯の時候に、米國の或地方を通過したが、實に人氣のない物淋しい廣漠の野を行く心地がした。

概してあちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離れる數尺の所から、四方に向つて枝が規則正しく手を擴げてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振はいかにも風趣が乏しいやうであるが、實際はさうでない。

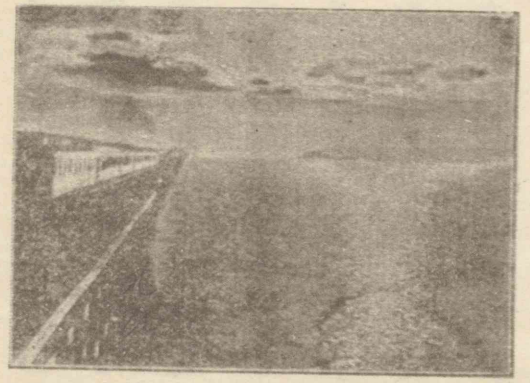
さて亞米利加の歌枕の一二を擧げて見よう。ワイオミングの平原は、眼の屆く限り一物もなく、雪がちら〳〵降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美の景には缺けてゐるが、一種壯大の趣がある。名にし負ふソルトレークの鹽の湖を中斷するルウシンの長路を通ると、

ワイオミング　合衆國の西部にある州

ソルトレーク　合衆國ユーター州に在る

平原の間に丘陵が起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、これ亦歌枕の價値あるものといはねばならぬ。またコロラドの北、所謂キャニオンの一部は、奇岩大石路傍に轉じて、さながらの鬼工と思はれる。此の景も歌枕に逸すべからざるものである。

さて此の歌枕といふ詞は、もう少し意味を廣くして見たいと思ふ。即ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街、煤烟の昇立る工場の光景なども、亦詩歌に寫し出して面白いと思ふ。例へば紐育の摩天閣なども、其の或物は建築美を持つ



ソルトレーク湖

コロラド　合衆國の一州キャニオン　合衆國西南部の河流。有名なる峽谷を形造る

紐育　北米合衆國の東部ニューヨーク州の都府米國最大の都會

ブルウクリン　紐育市にある一八七〇年から約三十年かかつて竣工した長さ五六〇〇呎の釣橋ホボーケンハドソン地方の一市

て居ないが、中には一種の新しい趣味の徹底して居る物がある。ブルウクリンの釣橋の上から紐育を望むと、建て列ねた大厦高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は二十階三十階の窓の燈が、空の星かときらめいて輝く。又ホボーケンの港口、朝霞の景色、夕暮の色、他の國に無い趣味がある。更に進んで人情風俗を加へて景色を見ると、愈好箇の歌枕がある。紐育はマヂソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、伊太利の移民が彈く哀れなバレルオルガンの聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實の音樂かとも聞える。

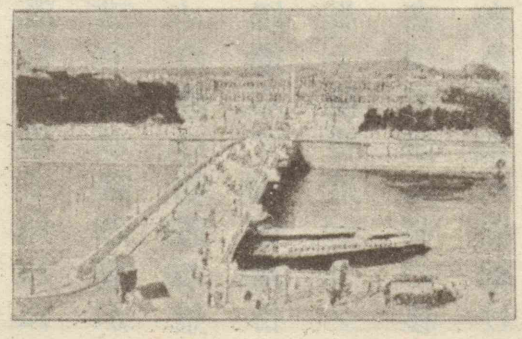
之とは反對に、冬の田舍に入つて見ると、葉は落盡した楓樹の並木路を雪を蹴つて小學生徒の走つて行く所などは、若き米

**ニューイングランド**
合衆國西部の人口稠密なる一地方

**シャンゼリゼー**
巴里市の大路

**長安**
支那陝西省の首都、今の西安府。周・秦・漢・晉・隋・唐皆此に都した

國萬歲。」の聲を發した位、ニューイングランドの田舍の景色は、落着いて若々しい、如何にも懷かしい感を與へる。歐米の大都會中、どこが好いと問はれたなら、誰も〳〵賞めるのは巴里であらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候の溫和、風光の美、風俗の雅致ある、かういふところに住んで、詩でも詠んでゐたいとは誰も望む所と思ふ。シャンゼリゼーの大通りは、實に長安の盛時もものかは、端麗高雅、世界第一である。歌枕はどこにもごろ〳〵してゐる。文明の最高に位するのは佛蘭西である、そして巴里である。


セーヌ河



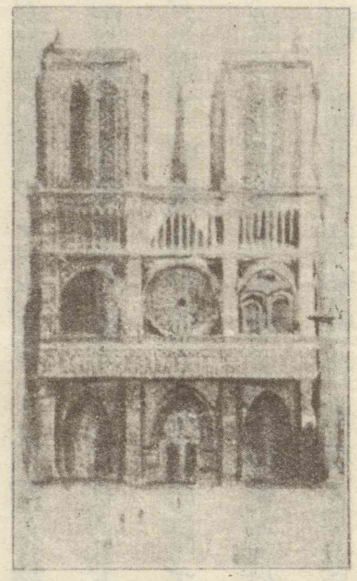
**セーヌ河**
巴里市を貫流してイギリス海峽に注ぐ

**ノートルダム寺**
巴里市内の大寺院

**ゴシック式**
歐洲にて中古時代に流行せし一種の建築樣式

**サンミシェール**
セーヌ河に架けた橋の一

それで又極めて華美な町中にも、何となく仙人めいた趣がある。車馬絡繹たるセーヌの河の邊りに、悠然綸を垂れた隱君子もある。橋の下には犬の理髮店がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。其の他ノートルダム寺の建築は、ゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムの總べての變化を味はうと、一日一晩の間眺望した事もあつたが、最も美觀を極めたのは夕方で、黃金の光の波を浴びた景色を、サンミシェール橋から眺めた。又夜のしら〳〵あ


ノートルダム寺院

けに、朝風の心地よく頰を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた樣な色から、薔薇色のはでやかなのに至るまでの色合の微かな影を味はふことが出來る。其の外花を賣る老媼の風、シァルロットの帽を被つて、ボールの箱をかゝへた店通ひの賣子の姿、ベルシロンといふ牛よりも大きい馬を曳く馬丁の振、夜半近く芝居のはてた後に雨が降つて、幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車は唸り馬車は軋る不夜城の壯觀。滿目の時勢粧、皆歌枕ならぬはなき趣である。

倫敦は景色の地として、餘り人は賞めないが、色彩の變化、其の色合の豐かな點は、ターナーの繪にある通りで、風俗美は尠ないが、光線の變化ばかりは味はふ値がある。併し同じく風光

ターナー　英國の風景畫家（1775–1851）



リッチモンド　ロンドンの西方九哩にある町。同名の丘の上にある

ナポリ　ナポリ州の首府。同名の灣に臨む

ザルツブルヒ　墺地利の西部東アルプス山脈の北邊。山水秀麗の地

を味はふにしても、住心地よい巴里の方が、あらゆる旅客の賞揚する所である。唯倫敦にもテームス上流のリッチモンド邊からの兩岸風景には、英國特有の美觀が現はれて居る。此の他風車・朱い屋根・淸い淀に名ある和蘭もよく、伊太利にはナポリ邊の夢の樣な景色もよい。瑞西は風光明媚と稱せられる國で、誰も皆賞揚するが、私は寧ろ南獨逸を採る。南獨逸ザルツブルヒの景は、日本によく似てゐる。要するに何處が一番風光が絕佳であるかといふ問題は一概にはきめ難い。見る人々の心によつて、天下到る處、如

ドンモチツリ

紅海　アラビヤとアフリカとの間にある細長い海

上田敏　英文學者、文學博士。京都大學文學部教授であつた

何なる處と雖も、皆相當の美は味ははれるものである。浪の激しい英吉利海峽の船の上でも、暑さ堪へがたい紅海の甲板でも、見る心によつてそれ〴〵の美しさが感ぜられる。元來歌枕などと取出でてきめるのは、或は間違つてゐはしまいか天下皆歌枕ではあるまいか。私の旅行は學術研究の爲でもなく、又特別な使命を帶びたのでも無い。たゞ漫然と飄遊したので、感覺を通して印象を捉へただけである。

（上田敏「心の花」）

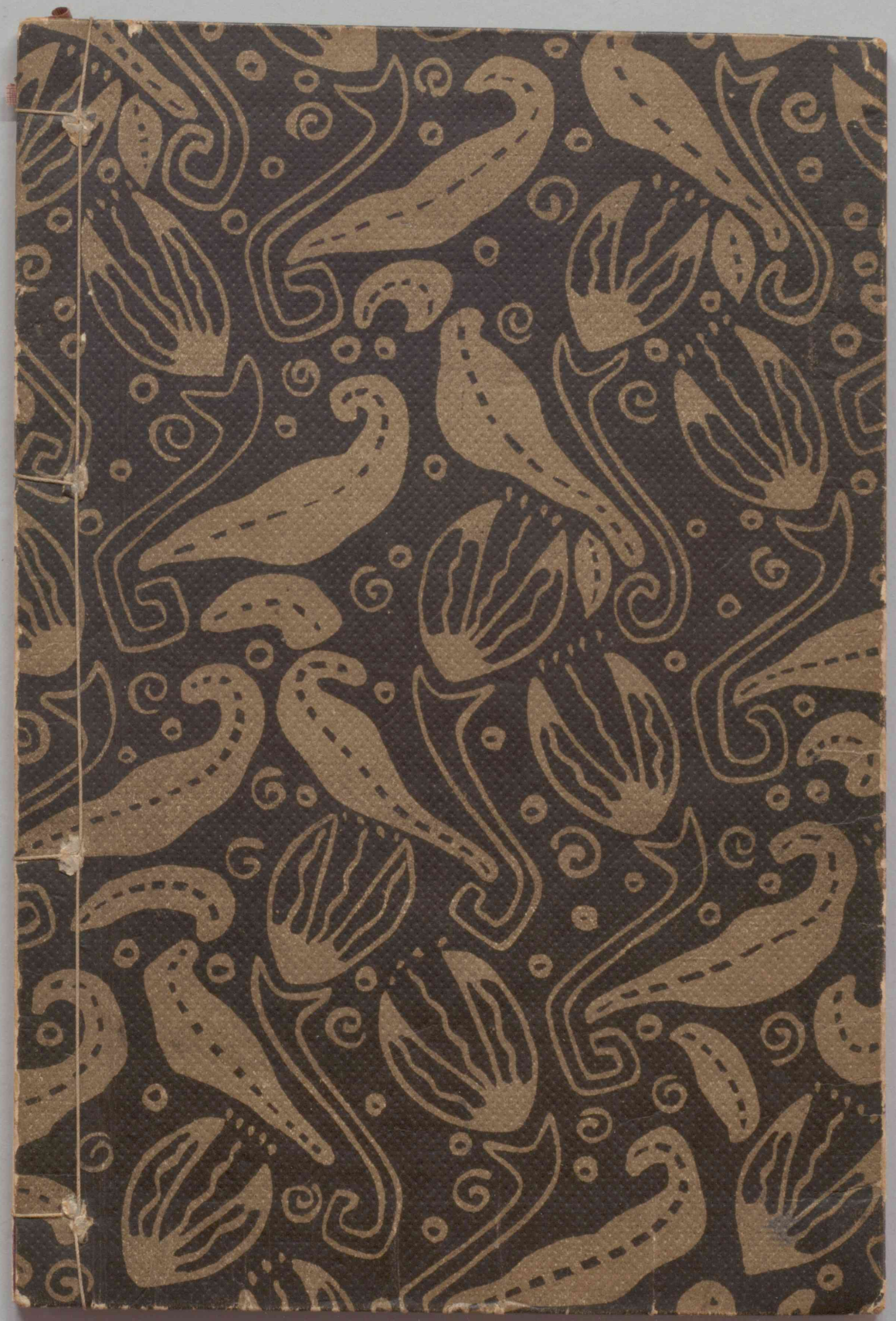
新庄高等女學校
三年　三之春野

大正女子國文讀本 修正版 卷五 終

大正七年九月廿五日印刷
大正七年十二月廿八日發行
大正十一年九月廿九日訂正再版發行
大正十一年一月十八日修正再版印刷
大正十二年一月廿二日修正再版發行

大正女子國文讀本修正版　全拾册
卷五、定價金參拾參錢
大正十三年度臨時定價　金五拾九錢

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町貳拾九番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店

著作權所有